

101 仙石久道逝去（天保五年九月五日）

一左之趣、兩寺江罷越可申談旨、於御用部屋寺社奉行江申談候処、則罷越申談、兩寺共奉畏候旨、御請申達候由、

經王寺

大殿様御逝去被遊、就御遺言御尊骸宗鏡寺江被為入候、尤其御寺江茂御法事御執行被仰付、御位牌可被建置候、

九月五日

宗鏡寺

大殿様御逝去被遊、就御遺言御尊骸其御寺ニ被為入候、此旨可被相心得候、

九月五日

102 上米壹石ニ付、三拾五匁方被成下

（天保五年十二月二十九日）

御勝手方之儀御難渋之段一統厚く恐察致し、去亥年面扶持ニ而御奉公相勤可申旨相願、忠志之至御満悦被思召、無御抛御借受米等も被仰出候処、一統遂艱難候趣、深く氣之毒ニ被思召、昨巳年当年格別之御仁慈を以、上米御用捨被仰出候処、一統承知之通り旧冬以来臨時御物入格外差湊、御勝手方必至と不被行届、依之猶又面扶持御頼被仰出度処、一同難渋之儀厚く氣之毒被思召、来未年一ヶ年去ル寅年被仰出候通、御借受米壹石ニ付三拾五匁方被成下候、此上如何様とも取統御奉公出精相勤候様、被仰出候事

但、都而去ル寅年被仰出候通、相心得可申事

十二月二十九日

○来未年も基調は面扶持とし、上米壹石につき銀三五匁を支給することにより、上米を返済したことにする。
去寅年は壹石につき七匁であった。

103 産物方懸り復活（天保六年五月十五日）

一 左之通、於御用部屋申渡之、

宇野甚助

岩田丹太夫

関口齡助

山本耕兵衛

右産物方懸り無滞御免、暫之内出精相勤太儀ニ被思

召候事

乗竹 弼

間中 連

右産物方懸り被仰付候事

一 右之通、申談候様御勝手方掛り青木弾右衛門之御勝

手方御用人へ申談、

宇野甚助

岩田丹太夫

関口齡助

山本耕兵衛

是迄産物方道具質之分は暫引請取調候上、追而跡懸

り之面々へ引渡可申、并産物方貸付銀掛り之申出候

ハ、相渡可被申候事

五月十五日

乗竹 弼

間中 連

右産物方貸付銀御勘定所御勘定奉行之受取、貸付取

計方産物会所規定之通取計可被申候、分り兼候儀有

之候ハ、先懸りへ承り可申事、并是迄道具質之分

は先懸り暫引請取調候上、追而引渡可被申候付、其

旨可被相心得候事

五月十五日

3 財政・経済政策

一〇四 上野本坊普請手伝出金額（文化十三年正月二十六日）

上野本坊向御普請御用被仰付候付、別紙之通出金被仰

候、御入用高仕上未相済候間追而出金増減可有之候
得共、為心得凡金高ニ而相達候、

一出金納方之儀者支度出来次第可被申聞候、若し兩三
度ニも被納候ハ、程合取調可被申聞候、伺之上可及
差図候、

一御用ニ可被懸役人、人数書出し可被申候、伺之上、
可及差図候、

一懸り御役人江贈物之義(儀)、御用被仰付候節并御用相済
候節、右兩度之外、贈物ニ不及候、右之趣申談候様、
牧野備前守殿被仰渡候付、此様相達候、

子 正月

凡金七千四百拾壹兩余 仙石美濃守

松平阿波守様御上納高

金三万貳千七百五拾貳兩余

丹羽左京太夫様御上納高

金壹万貳千八百四拾九兩余

上納申金銀之事

高金七千三百九拾兩貳步永百三文九分

金貳千七百九拾兩貳步永百三文九分

但、此銀六匁貳分三厘四毛

外 金貳千三百兩 当子三月十八日上納

金貳千三百兩 当子六月廿四日上納

一五 舟所持願(文化十四年二月十一日)

一町奉行達、

岸田屋 庄左衛門

右代々宿屋商売并城崎湯治之人船大小二艘相働候
処、他所入湯之客差懸り、罷越乗り申度旨申者有
之節、右船出し切無抛相断陸通り参り候もの間々
御座候ニ付、水主始御当所ニ落し候運賃取はつし
候儀度々御座候付、此上小船壹艘相立申度、尤船
屋半左衛門方ニ而も貳艘所持居候付、兩家之船四
艘出切候上、相働候心得御座候、并洪水之節、乍

恐上下馬場町之御家中様方御退之節、御差支も無之様仕度ニ付、以御慈悲御赦免被成下候様、相願候由、故障も無之候ハ、勝手ニ申付候様申談、

一〇六 懸売制限願 (文化十五年二月二十三日)

一 町奉行達、

左之趣相願候由申達候付、付札之通相心得候様、

町奉行江申談、

乍恐奉願上口上覚

一 町方諸商売之儀少々、之利徳を以渡世仕候儀

ニ御座候処、近年來現銀相減、懸商多ニ相成、

代銀不手廻リニ相成候故、仕入方も差間ニ相成、

其上懸方兩季ノ取メ之所、近來ハ別而不集ニ相

成、諸商売人とも取統難仕、一統必至与難涉至

極仕候、右ニ付、此度仲ケ間立候諸商売人相談

候へと仕も、下分申合而已ニ而ハ逆取メリ不申

故、俱々困窮仕候様相成候付、不願恐多、左ニ

御願奉申上候、以 御慈悲、御聞届被為成下候

ハ、商売方取統も可仕与難有奉存候、

一 懸商ひ之儀、是迄無滞商ひ仕來候方并其年払或

者五節句相對之上、通差上候方者格別、其外者

一切懸売之儀、御断仕度事

一 諸商売諸職人都而仲間立候ものハ仲間限規定相

立、是迄敷掛有之候向者其店を差置、外江参り

候共、一切商ひ仕間敷候、若無抛商ひ仕候者ハ

先得意先江相糺、敷掛等有之候ハ、先得意江右

敷掛等相弁候上、自分之得意ニ可仕候事

但、現銀売ハ右ニ不拘候事

一 近来在々小商人多数仕來候故、其村々ニ而用弁

仕自然と御城下江罷出候もの少ク畢境(邊)右等のもの

のともハ只当然之利益を以取捌、往々商ひニ而

渡世仕候ものニ不奉存、且ハ本業之農作を打捨

候上、町方代呂物不利ニ相成、農商共追々衰微

之道理ニ御座候間、是等之者ともハ小商ひ御差

付札
可為被
仰付候

付札
此ケ糸
難取上
候、

付札
此ケ糸
難取上
候然追
而合も
有之事

留被成下度、夫共商ひニ望之者ハ御城下江罷出、
店出し仕候様、被 仰付被成下度候事

右奉願上候趣、御憐愍を以、

御聞届被成下、諸向被仰渡被成候ハ、金銀之
融通もよろしく、他所より入込候代呂物ハ十分ニ
仕こなし買取候故、売方過分ニ下値ニ相捌可申
候、左候ハ、以 御陰、賑々敷渡世も仕候様相
成可申与奉存候、現銀売ニ相成候へハ、町家ニ
而ハ格別為筋ニも相成可申哉、質素儉約之第一
ニ相成仕、乱候風俗も自然と取直し可申、是迄
之趣ニ而ハ万事十分ニ相弁候故、兎角分外之暮
をも仕候ものとも出来仕候事哉与奉存、奉恐
入候、

右奉願上候趣、乍恐厚 御賢慮被成下、町方之
者御引立、以 御慈悲、被 仰付も被成下候ハ
、難有仕合奉存候、然ル上者、仲間銘々懸吟味
御定法堅相守、御蔭を以、追年諸商売繁昌仕候

様、昼夜無油断業体出精可仕候間、幾重ニも

御憐愍を以、御聞届被成下候ハ、町方一統難有

仕合奉存候、以上

寅正月

十町

行事共

〔七〕 名主・大庄屋・小庄屋御用達召出し御用銀御頼

(文化十三年五月朔日)

追日薄嗜之節、何れ茂無事罷在、一段之儀存候、

且先般上野御本坊御普請御手伝被蒙仰、御大慶思

召候、乍然、御物入多之義^(儀)ニ付、無御抛、此度御

用銀被仰付候一統申合、遂出精致調達候様ニと存

候、委細者御役人共可申談候、

一 左之通り御郡奉行江申談、

一 銀五百貫目

右成丈ケ出精致、上納不手操之もの者、詰り四

ケ年迄ニ皆納候様可致事

一 今日御殿江被召出候人別、左之通、

名主	小兵庫	小左衛門	孫右衛門
嘉十郎	藤兵衛	吉兵衛	
小庄屋 又三郎	仁右衛門		
町分御用達	米屋六兵衛	鍋屋惣兵衛	
下郷宮内村	山之中日野辺村	同佐々木村	
大庄屋 市郎右衛門	又右衛門	太郎左衛門	
美含郡伊津村 同郡養父市場村	与惣左衛門	又右衛門	
美含郡坊岡村	三郎右衛門	丹後熊野郡三分村	
又惣左衛門	源次郎	又右衛門	
美含郡香任村庄屋	勘次郎	一日市村庄屋	
御用達	義父郡広谷村	下郷森尾村	
庄左衛門	源次郎	源太夫	
下郷森尾村	源作	口小野村	
山之中栗尾村	平日村	彦左衛門	
弥兵衛	清太夫	八兵衛	
義父郡養父市場村	夏梅村	義父市場村	
助左衛門	助左衛門	三郎兵衛	
広谷村	惣右衛門	養父市場村	
惣右衛門	三郎右衛門	六右衛門	
養父市場村	三郎右衛門	小城村	
高柳村	作左衛門	善右衛門	
作左衛門		太左衛門	
		江原村	
		義右衛門	

美含郡訓谷村 香住村
 浅右衛門 勘助
 郡中惣代 小庄屋町分長砂村 下郷奥小野村 片間村
 九右衛門 藤次郎 六兵衛
 山之中洞野村 相田村 養父郡朝倉村
 六郎兵衛 孫右衛門 孫左衛門
 高生田村 氣多郡松岡村 氣多郡新村
 太兵衛 与右衛門 太左衛門
 美含郡御又村 若松村 熊野郡芦原村
 次郎太夫 仁左衛門 定五郎
 竹野郡筆石村 善次郎

○原文横並びを縦並びに改めた。なお病氣名代で出たもの名は省略してある。

一〇八 被仰付候御用金割当額 (文化十三年六月十一日)

一 高銀五百貫匁
 内
 一 六拾貫匁 (町方并 地方とも)
 但、式千四拾四石式斗九升六合町方
 一 四四拾貫匁 御郡中
 内

壹万六千六百貳拾四石三斗八升五合
六拾壹貫六百匁 下郷

但、貳拾六貫六百匁 明和七年增

九千八百四拾壹石四斗三升四合
六拾壹貫六百匁 山之中

但、貳拾六貫六百匁 同 断

九千八百貳拾五石壹斗六升三合
九拾六貫八百匁 義父郡

但、四拾壹貫八百匁 同 断

壹万七千七百三石壹斗三升五合
七拾貫四百匁 気多郡

但、三拾貫四百匁 同 断

壹万四百五拾壹石五升
八拾六貫貳百四拾匁 美含郡

但、三拾七貫貳百四拾匁 同 断

七千五百五拾貳石壹斗五升九合
四拾貫四百八拾匁 丹後兩郡

但、拾七貫四百八拾匁 同 断

三千貳百七拾石七斗三升三合
貳拾貳貫八百八拾匁 (美作) 勝南郡

但、九貫八百八拾匁 同 断

一〇 銀札新銀札との引替令(文政二年六月四日)

一 左之通御目付江申談、

近来銀札文字見へ兼候も有之ニ付、追々新銀札ニ引

替差出候間、取交可致通用事

右之趣、町在江相触候様申談候間、為心得、御家中
にも各々可被申伝候、以上

六月四日

堀新九郎

御目付中

二〇 於札場札と銀引替率変更(文政三年五月二十三日)

一 於札場以来金銀錢取交引替致し候様并是迄札を銀ニ
引替之節式步差之処、以来三步差ニ而引替候様、可
申談旨、御用人江申談、

二 切手札銀札位違ひ取引禁止(文政三年七月十二日)

一 左之通町在江申談候様、兩奉行江申談、

切手札銀札と取交無滞通用可致旨、毎以申触置候
処、近来切手札銀札位違ひニ取引致し候者有之趣
相聞、如何敷事ニ候、右体之もの於有之者、人別
相札、急度可及沙汰候事

七月十二日

二三 無尽講御頼 (文政三年十一月五日)

名主

大庄屋

小庄屋

右大書院三之間方罷在、静馬忠左衛門二之間江罷出、
左之通申渡、御郡奉行取合、

(申渡文略)

町奉行申渡

右同断

右相濟退座之上、御郡奉行町奉行方切々左之通申渡、
御郡奉行申渡也、
先年御用銀被 仰付候後、間も無之候得共、近年

一右御貸付被成下高、左之通、

打統穀直段下直、其上臨時御物入等差湊、地他御

一米四千九百九拾五石式斗三升七合九勺

御郡中

借財多、御勝手向差間ニ付、無御抛、今般他向并

一大豆五百五拾壹石式斗壹升六合

町方へ無尽御頼ニ付、御郡中同様御頼被遊候間、

四千七百四拾六石四斗五升三合九勺

当節柄何れ茂太儀之儀候得共、申合逐出精、御割

代銀貳百三拾七貫三百廿式匁六分九厘五毛

合之懸銀早々調達可致、委細之儀ハ御代官方可申

石別五拾匁積

談候間、一統申合御企之銀高早々出銀御要用御間

一銀七百七拾壹貫九百拾九匁六分

御郡中

一 同七百六拾八貫七百六拾四匁四分壹厘 町方

ノ千五百四拾貫六百八拾四匁壹厘

印合

銀千七百七拾八貫六匁七分五厘

金ニノ

貳万九千六百三拾三兩壹歩仁朱卜

兩替

銀四匁貳分五毛 六拾匁積

講元

一日市村

治郎兵衛

広谷村

庄左衛門

森尾村

源太夫

同

源藏

米屋

六兵衛

鍋屋

物兵衛

香住村

勘助

伊津村

善太郎

新村

ノ太左衛門

二三 無尽講停止（文政四年六月二十七日）

名主

大庄屋 共

小庄屋

御勝手向近年 御公務を始、追々御物入差湊、御不手繰ニ付、御用銀被 仰付候方間も無之候得共、無御抛、旧臘自他共無尽御頼被遊候処、町在加入之面々難渋之中致出精、御講銀追々遂上納候段、御満足 思召候、当節御勝手向御調被成候と申義（後）ニハ無之候得共、町在追々難渋之儀ニも相聞候付、格別厚御趣意を以、御無尽被為止候付、上納銀不残御差下ヶ相成候間、此旨不洩様申談、出銀向々江無遲滞相渡可申候、此末臨時御物入等御出来、無御抛節ハ御頼筋可有之候間、其節ハ御間を合候様、可申聞置候事

二四 他所銀札通用禁止令（文政四年十一月七日）

他所銀札致通用間敷旨、前以申触置候処、近来相馳ミ取交致通用候趣、相聞如何敷事ニ候、以後堅ク可為無用候、小役共差出時々遂吟味候、此段相心得可申、若取交致通用に於てハ、所持之分取上、其上急度可申付事

但、場所ニ寄、商売方無抛取引不致候而ハ難相濟向も有之候ハ、其旨可申出、糺之上可及差図候、

二五 縮札に関する要望書

平尾源太夫家文書

- 一 縮札銘々封印町方名主在方大庄屋加印封印仕、ノ札取渡、并ニ利息請^(儀以下同)弘之義者名主大庄屋請、預り主御用達之内其向々ニ而身元慥成者へ被仰付候事
- 一 御利足月杓步被成下候事
- 一 銀札ニ而郡々ニ而札高割被仰付候事
- 一 新札産物札此後新ニ御差出被成候義、御無用被成下候様奉願上候、
- 一 金銀売買仕候者并ニ他所札通用仕候義、御敵重ニ御差

留被仰付被成下候事

一 上納縮札御通ニ夫々御受取御印被成下、ノ札御印形被遊候事

一 ノ札利足之義者十二月向々利足書替札ヲ以、御上納御受取可被成下候事

一 開封限月并ニ縮札何月迄ト申義被仰付被成下候事

(文政八年)
酉正月

御^ノ札預り人

一 町方・山之中

一 下郷

一 養父郷

一 大屋谷

一 気多郡

一 美含郡

ノ

米屋治左衛門
鍋屋惣兵衛
平尾源太夫
同 源藏
長沢庄左衛門
又二郎
夏梅村三郎兵衛
長沢太左衛門
久代 勘助

二六 銀札加印 (文政四年十一月二十一日)

兼而申触置候通、於札幌銀札ニ致加印候間、所持之銀札明廿二日方当月廿九日迄ニ差出可申事

右之趣、町在江申触候間、御家中江各々々可被相達候、以上

十一月廿一日

岩田静馬

御目付中

二七 借銀三ヶ年据置御頼(文政四年十二月二十九日)

御用達共江

近年御勝手向御不手繰ニ付、御用向度々被仰付候処、何れ茂致出精、御要用御間懸を合、御大慶思召候、然ル処追々御手繰御難渋ニ付、大坂表御館入向、是迄莫大之御借入有之候得共、猶又無御抛趣を以、今般銀高御借入ニ相成り候得共、是以御返済方御趣段不容易御儀、彼是必至と御差間ニ付、甚気毒之儀ニ候得共、御借財口々三ヶ年之間、御借居江被遊度段、一統江御頼被仰出候、尤当年之処、利足年五朱被成下候、委細之儀

は御勘定吟味役方可申渡候間、一統承知之上、時節柄差支多々茂可有之候得とも、前文之趣相舎、御取統第一之儀ニ付、心を配り品よく承り届、御年限中御間を合候様ニと存候、何れ□□□□□□□□出精之儀ニ付、此度御料理被成下候之処、時節柄ニ付、米春ニ至り御沙汰可有之候事

二八 不換紙幣発行令(文政二年十二月十九日)

一 御郡奉行達、

近年打統豊作ニ而一統安堵之事ニ候得共、米穀沢山ニ而捌悪敷、下分差間之趣も相聞、明年季候之程も難斗候間、村高ニ応し米穀貯置凶年之手当ニ為致度候得共、俄之儀故、手当も難行届村々も可有之哉、依之銀札同様通用之銀札切手願次第貸渡し可申間、村々相心得可申事

一村高百石ニ付拾石ツ、之積りを以、除置可申事

一右銀札切手、御領分中相互ニ融通可致事

一 諸上納物之節、銀札通り同様相納可申事

一 右切手之儀者札場ニ而銀子引替候儀不相成、尤来ル

辰年夕七ケ年目ニ至リ正銀札ニ引替可遣事

一 右切手拝借之儀者七ケ年賦ニ元銀返納可致并四朱之

利銀可差出事

一 米穀困置候村々ハ、春ニ至リ小役見分可為致候、尤

時宜ニ依、売払候とも、村々可致勝手候事

卯十二月

今般御領分中、為融通、左之通銀札切手差出候間、銀

札ニ取交無滞可致通用、七ケ年目ニ正札ニ引替可相渡

事

一 銀札拾五匁

一 同 貳拾匁

一 同 三拾匁

一 同 五拾匁

一 同 百匁

二九 銀札切手流通促進令(文政三年三月十七日)

下分融通銀札切手差出銀札ニ取交可致通用旨、先達而

度々申触置候処、心得違之向も間々有之、故障申候者

相聞、如何敷事ニ候、併銀目高之切手ニ付、先般七匁

三匁之小切手差出し候得共、猶又今度融通為宜左之通

小切手差出候間、是迄之切手并銀札ニ取交可致通用候、

若又此上心得違之者有之候ハ、相糺候上急度可申付事

銀札切手

壹匁五分

六分

四分

ノ

辰三月

三〇 小額銀札切手発行令(文政三年五月十七日)

一 是迄差出置候三匁切手、大振ニ而不弁利之趣相聞候

ニ付、今般相改判木ニ而摺立候小切手差出候間、是

迄之切手と取交可致通用、尤右判札切手と引替度も

の有之候ハ、御勘定所へ差出可申、引替可相渡事

一 先達而触置候七匁切手、是又三匁同様別札ニ而摺立

差出候間、兩様銀札取交無滞可致通用、毎々申触置

候通、万一故障ケ間敷申者於有之者相糺急度可致沙

汰候事

辰五月

二三 大坂七軒銀主銀札引替保証請書

(文政四年十一月十五日)

大坂御館入

鍵屋龍三郎

鎊屋六兵衛

笹屋勘左衛門

囃喉屋三郎左衛門

平野屋作兵衛

舛屋平右衛門

鳴屋市五郎

右之面々、今般銀札場引替融通筋之義以後引請、差支

無之様取斗可申旨約定相濟、依之於札場惣代鍵屋庄

助・囃喉屋貞助名主大庄屋江演説左之通、

一 今般御当所御銀札場御混雜之趣、依之大坂御館入七

軒之面々申合、以後御札場引替并御融通筋引請、御

差支無之様仕度候間、御銀札之儀御領分中差滞無之

通用仕候様、御演説有之様、致度候事

一 七軒之面々申合、御銀札ニ追々加印仕候事

一 追々模様ニ寄当御役所之御添翰并銀札持参有之候

得者、大坂鍵屋龍三郎店ニ於て引替可申事

右之趣御承知可有之候、町在江も可相触候、

十一月十五日

二三 兩替相場 (文政五年二月七日)

一 左之通兩替書并相場之義(儀)申達候由、

一 錢を銀ニ引替 丁百三文

一 銀を錢ニ引替 丁百四文

一 金を銀ニ引替 銀六拾匁

一 金を錢ニ引替 銀六拾六匁式分

米屋
六兵衛

二三 産物会所生糸集荷令(文政五年)『高柳村御用帳』

八鹿町中央公民館蔵

御郡中江

一 糸之儀は当国第一之産物ニ候処、多分丹後辺江差出
売買致来候、是は融通筋之義(儀以下同)ニ付尤之事候得共、近
来御城下ニ而縮緬機相始、追々機織繁栄ニも相成、
第一産物之品を思ひくニ所々江相捌、農家方直ニ

他所者へ売払候而者自然国益相減じ候道理にも可相
成哉ニ付、当御領分中商人へ売渡し可申候、尤御領
分ニ而も多分之蚕ニ而糸夥敷事ニ候得者、御城下機

織聊之事故何れ丹後辺へ売捌不申候而者糸も売余り

先方も差支候義も可有之ニ付、是迄之通り何れへ成

共売渡し候義勝手次第之事ニ候、乍併産物ニ相成候

義ニ付他国他領へ売渡し可致候へ、其以前産物会

所ニ而改を請売渡し可申候、此旨急度可相心得候事

午五月

二四 文政五年改革令—仙石左京—(文政五年五月)

右之趣申談有之由、左京方被申間、

町在へ

一 諸商人問屋并株持ニ致し売買致し度ものへ、同商売
之もの申合、五月晦日限可願出候、尤右問屋并株相
立候上ハ老入立売買ハ難成候事ニ候、

肴屋仲間へ

一 北浦(P.T)鯨船肴類他領掛組候而ハ融通方差問候趣ニモ相
聞候付、昔ニ立戻り美含郡御領分浜付村々ニ而取揚
候魚類御領分気多郡之内最寄之場所江引揚せり分ケ

為筋ニ相成、且ハ他領引合無之下直ニも可置候ハ、
肴屋仲間申合、早々始末可申出候、尤仕入銀難及自
力処ハ産物会所へ申出候ハ、吟味之上貸渡し可申事

一 糸之儀ハ当国第一之産物ニ候処、他国他所者へ農家
方直ニ売払候而ハ自然国益も相減候道理ニ付、産物
会所相建、以来ハ於同所買入并質糸ニ相成候間、左
之通可相心得事

一 糸中買致し度ものハ来ル廿一日迄ニ其旨可申出候、
於産物会所、銘々鑑札相渡可申事

但、鑑札之儀ハ当年限りニ而以来相願候而も差出

不申候、鑑札無之中買致し候もの於有之ハ、
急度各可申付事

一 農家方他国他領者へ不売渡、御領分のものへ売渡可
申事

一 中買之もの我儘之買方并下直之買方致し、其上糸代
払方差滞等有之候節ハ早速産物会所江可申出候、取

調之上急度筋立申付、其上過料為出、中買取上ケ候事
一 百姓家方中買ヲ除ケ抜売致候ハ、過料申付候事
一 中買之者方他所者へ直売之儀堅く無用の事
但、産物会所ニて改ヲ請、他所へ持出し候上売買

ハ不苦候事

一 中買之者方他所へ糸荷相送申候節ハ産物会所ニて相
改候上、差出可申候事

一 美含郡・山之中等ハ場所柄ニ付、糸荷出石江差出候
而ハ丹後江出候節ハ持戻シニ相成可申候間、別ニ中
買之内ニて改申付置候間、産物会所之通諸法取計可
申事

一 村々家々之糸高庄屋相改、把数書出し可申事

一 中買仲間之売買たり共荷数書把数産物会所可申断事

一 糸代銀正金銀札望之品可相渡候、中買方産物会所へ
糸差出候節同様勝手之品相渡可申候事

一 銀拾匁・五匁・壹匁之切手札、一日市村次郎兵衛・
広谷村庄左衛門・森尾村源太夫名前ニ而差出候銀札

同様可致融通、引替之儀ハ産物会所ニおゐて引替可遣、尤上納筋に差出候義(儀以下同)も不苦候事

一 村々中買入込之節庄屋へ相断可申候、庄屋方ニも鑑札相改可申事

一 他所カ糸当仕入致し貰ひ居候面々者、其模様ニ応し相談之上取計可申候事

(以上五月十五日)

一 左之趣御勝手方頭取左京方カ諸役所江申談有之候様御用人江申談有之、

諸役所江

一 諸御入用之品御買入ニ相成、代銀払方其役所ニ而引請拵ひ来り候処、左ニ候ニ而ハ自然御事多ニ而、御時節柄故成丈ケ事少ニ相濟候様專一之義ニ候、以来都而御入用之品代銀払ひ方御勘定所ニ而取斗ひ候様被仰出候間、其趣売上ニ左之通奥書致し差出可被申事
前書之通相違無之候、御月割之内ニて御払可有

之候、

月 日

御役名印

(以上五月二十七日)

一 諸役所毎月其売ケ月分之致算用差出、御勘定奉行立会可被致算定事

一 御手銀年中格外之御儉約被仰出候義ニ付、万事如何様とも致し御出方少く相成り、御積帳カ減少ニ相成候ハ、格別之出精之義ニ付、其所心配り有之、心付之義聊無遠慮可被申達候、

一 諸役所筆墨紙類御仕入御月割之内ニ而其役所々ニ而相払候処、右も奥書を以御勘定所ニ而請拵ひ可被致候、筆墨等請取書付之義ハ左之通認可被差出候、

銀札何程 筆墨代何役何人分考人ニ付何程
右之通請取申候、

御役名印

一 諸向払方之義、月々十日・廿日・廿七日と相定置候間、其日限請取ニ出候様可被申談候、尤他所もの等

ニ而直ニ請取引取度旨願出候ハ、御勘定所ニ其旨受合、定日之外ニ而も相渡可申候、尤出役日無之候ハ

、一兩日見合、出役之節相渡可申事

一 諸役所是迄之致勘定差出可有之候、此節御省略中故出仕日少ニ付休日ニ罷出候哉、又ハ宅ニ調ヘ候とも早々致勘定差出可被申候、

御用人談シ

御取
御勘定所
手 伝

三五 四万両五ヶ年賦上納御頼 (文政五年五月十六日)

大庄屋
小庄屋 共

右御勝手方御不手繰ニ付、御用銀と申ニも無之候得共御頼筋有之、今日御対面所へ被招呼、御吸物御酒御肴一汁三菜御懸合被成下、御頼筋御郡奉行方申渡候処、奉畏難有旨御請御礼申達候由、

申渡書左之通

御郡中江

近年御勝手向段々御不手繰ニ相成、当節必止と御差支ニ被為成、無御抛自他御借財之分暫之内猶予御頼有之候得共、大坂表新御借財五万両之儀者猶予御頼も難相成御都合ニ付、仍而御勝手向為御取直、御年限被為立、御手元敷敷御取縮被遊候上、先般御家中へ御借米等も被仰付候へ共、尚御返済御力ニ難及候、右ニ付太義之事ニ候得共、申合右五万両之内四万兩引請、五ヶ年賦を以大坂表へ納入具候様御頼被仰付候、但し、高懸り軒別割并身上相応之もの候へ見付等を以割合可致調達候、尤近年之内ニハ御公務可被仰付哉ニ候得共、其節ハ御用銀被仰付間敷候、委細之儀ハ御代官より可申談旨可相心得事

午 五月

三六 産物札発行布告 (文政五年五月十七日)

一 左之通御目付江申談、

〔端町小庄屋〕

今般産物会所ニおゐて糸買入候ニ付、為融通左之切
手札一日市村次郎兵衛・広谷村庄左衛門・森尾村源
太夫名前ニ而差出候付、銀札同様可致通用、尤引替
之義者産物会所ニ於て引替可遣候、并上納筋之義不
(儀)以下同

右御勝手方之義ニ付御頼筋有之ニ付、御対面所へ被
召呼、御吸物御酒御肴并一汁三菜懸合被成下御頼筋
之趣御受申達候由、申渡左之通、

町在江

苦候事

(郡中への触文と同文に付き前略)

先般御家中へ

銀拾匁

御借米も被仰付候得共猶御返済御力ニ難及候、依而

銀五匁

右五万両之内四万両御郡中ニ而引請御返済御頼被仰
出候、右ニ付一統太義之事ニ候得共町方ニ而右借財

銀壹匁

残壹万両之内三千両引請、五ヶ年賦を以大坂江納入

右之趣町在江相触候間、為心得御家中江各方寄々可
被相達候、以上

五月十七日

荒木玄蕃

御目付中

具候様御頼被仰付候、但、高懸り軒別割并身上相応
之者へハ見付等を以割調達可致候、尤近年之内ニハ
御公務被蒙仰哉ニも候得共、其節ハ御用銀被仰付間
敷候、此段申渡候事

二三 出石町方、三千両引請御頼(文政五年五月十九日)

午

五月

一 御郡奉行達、

一名主

三六 諸役所經費払方勘定所一括令

(文政五年五月二十七日)

左之通御勘定所詰御勘定奉行并吟味役へ左京方を申達有之、

御勘定所詰

御勘定奉行

一 今般諸役所御入用之品御払ひ方御取^レ御勘定所手伝

ニ 而相払ひ候様被仰出候間、一役所ツ、之箱越拵へ

置、右江御積帳面之銀方を拾式ヶ月と割、壹ヶ月分

入置、其向々を請取ニ出候へ、悉く帳面ニ為記、立

会可被相渡候、月末為致勘定、銀高申達可有之候、

一 諸役所を御年限中格別ニ御出方少ニ心配可有之、

尤其御役方ニ而も御積帳控へ置、時々引合、右を御

出方増し候義も候へ、無遠慮其役所江申候上ニて、

(儀以下同)

御勝手方懸り江其段可被申達候、

一 諸向払方月々十日・廿日・廿七日と定置候之間、其

日限ニ相渡し候様可被申談候、尤他所者等ニ而直ニ

代請取申度趣ニ而其向を通達有之候へ、定日之外ニ

而も相渡可申事、尤出役日ニ無之候へ、一兩日過候

而も出役之上相渡し不苦候事

一 御取^レ御勘定所手伝取斗方之義可被申談候、

一 是迄諸役所江御暮を貸し致勘定候之趣ニ候処、右ニ

而ハ自然事多ニ相成候道理ニ付、以来ハ貸しと申儀

相止メ其時払ひニ取斗ひ可被申候、

御勘定所吟味役

一 今般諸役^(所脱)江御入用之品代銀払ひかた御取^レ御勘定所

手伝江被仰付候間、御勘定奉行と申合、立会取斗可

被申事

三九 勝手方立直し意見具申勸誘令

(文政五年五月二十七日)

左之通御勝手頭取左京方を申談有之、書付御用人へ相

渡、段々ニ順達致し候様、申談有之、

御用人

申事、右之趣御家中江各方寄々可被相達候、以上
十月十七日
荒木玄蕃

御郡奉行
御普請奉行

御目付中

御勘定吟味役

一御郡奉行達、

先達被仰出候通、御勝手向御差間ニ付、御家中御扶

先達而方問屋相願候内、左之通申付候由、

助之内御借米等被仰付、万端格別之御省略被思召被

仲買株被仰付候付、為冥加銀年

多葉粉問屋
仲買

為在候ハ、心付之儀被申候様被仰出置、定而一統思

(儀)以下同

々銀式枚ツ、上納、

三拾六人

慮も可有之義、然ル処尚又今般町在江御用銀御頼被

式拾株ニ被仰付、他所方直売仕候者、仲間之者共方遂吟味差留

鍛冶
仲間共

仰出候程之儀ニ付、此上尚更各心付之義少しも無遠

慮被申達候様被仰出候事

五月

三〇 株仲間・問屋認可 (文政五年)

一 左之通御目付江申談、

本町吹田屋

笹板問屋

六兵衛

本町油屋

煙草問屋

仁右衛門

右之通此度依願申付候間、右之もの共方相調へ可

様、尤為冥加銀三枚ツ、上納、

油屋

仲間

冥加銀三枚ツ、上納、

笹板問屋願之通被仰付候処、御

多葉粉問屋

仁右衛門

もの直売仕候ハ、穩便ニ相對仕

差留申候、万一其節違背仕候ハ

御威光を以御差留被成下候

触流様被成下、当分之処アリ難
相請ニ付、此上玉売仕度者らハ
少々ツ、之口銭下相對ニ仕度旨、

笹板問屋

吹田屋

六兵衛

一 左之通御目付江申談、

(以上十月十七日)

松板
杉板 問屋
杉皮

八木町

因幡屋

勘五郎

竹問屋

田結庄町升形

七味屋平八借宅

桐野屋

長七

右之通此度依願申付候間、右之者ハ相調可申事
右之趣御家中江各々寄々可相達候、以上

十一月四日

仙石左兵衛

御目付中

(以上十一月四日)

一三 笹板問屋廢業認可 (文政六年三月朔日)

一 左之通御目付江申談、

本町吹田屋

六兵衛

右先達而依願笹板問屋申付置候処、仕入不行届ニ付
尚又依願問屋赦免申付候、以後勝手ニ相調可申事
右之趣御家中江各々寄々可被相達候、以上

三月朔日

荒木玄著

御目付中

一三 産物会所鑑札行司氏名 (文政六年) 『米里村御用帳』

八鹿町中央公民館蔵

一 糸之儀昨年ハ厚御御趣意を以国産ニ相成、産物会所
御建被置、御仕法書を以申触候処、心得違之もの有
之、鑑札不致所持勝手ニ糸売買致し、并繭之儀者不
苦杯とは是又我儘ニ売買いたし候族有之趣、不埒之
事ニ候、糸之儀者まゆを以仕立糸ニ相成候儀ニ候得
者、鑑札不致所持、勝手ニ可買取咎無之、又売渡し
(處)以下同
候義可致咎無之処、心得違之族有之趣相聞如何義ニ

候、以来右体之もの於有之者規定之通急度申付候而、まゆ糸共鑑札無之もの共売買堅可為無用事

一 鑑札之義者以来大庄屋引請、中買行司之もの江取暖申付候間、鑑札所持致度ものハ大庄屋江願出、行司江鑑札料相渡、引替ニ受取可申事

一 中買之もの共鑑札枚所持致し居候而、一家方式人三人罷出鑑札所持不致、買歩行候之趣相聞へ如何敷事ニ候、以来枚之鑑札ニ而者老人之外者堅可為無用候、若し一家方式人三人罷出候ハ、銘々ニ鑑札所持可致候、右之趣急度可相心得事

一 鑑札行司名前左之通り

府市場 江原 浅倉 伊佐
勘右衛門 五左衛門 直右衛門 六右衛門
宿南 ヤブ 栗尾 中山 藏垣
利兵衛 熊太郎 弥兵衛 六平 弥右衛門
惣兵衛 林助 惣右衛門

一 鑑札支配請左之通

府市場勘右衛門組
手辺 同村
太郎右衛門 太五郎 又右衛門 勘右衛門

土居 同村
伊三郎 三郎右衛門 源右衛門 市三郎
上ノ郷
三郎兵衛

一 江原五左衛門・浅倉直右衛門組

三枚 同村
五左衛門 喜兵衛 勘七 同
青田 同 小兵衛 勘右衛門
源兵衛 又三郎 同 岩中 地下
国分寺 石立 同 弥布
太三郎 三郎右衛門 仙助 次郎兵衛 要八
同 久斗
丈右衛門 長右衛門 浅倉三枚 同
同 茂右衛門

一 伊佐村六右衛門・宿南利兵衛組

浅倉 赤崎 山田 万却
久兵衛 五左衛門 与八郎 市兵衛
二枚 同
利兵衛 長右衛門 庄七 同 嘉左衛門 伊佐
浅間 同 小川 小佐
德左衛門 助二郎 源太夫 一郎次 六右衛門

一 養父熊太郎請

養父 同 網場
平太夫 藤助 太兵衛 忠左衛門 勘藏

一 ヒロ谷林助請

同 同
半助 武左衛門 庄五郎 又兵衛 久助 半兵衛
一 伊豆惣右衛門請

高柳 同
惣左衛門 安兵衛 作左衛門 善太郎 伊助
いつ 中村 夏梅 同
林兵衛 一郎右衛門 和兵衛 孫八 治兵衛

一 蔵垣村弥右衛門請

同 大杉 市場 同
武右衛門 勘五郎 佐兵衛 伊三郎 忠兵衛
加保 糸原
源太夫 半兵衛

一 美含郡市場村太兵衛請

市場 同 桑野本
惣右衛門 一郎左衛門 藤右衛門 友二郎
須谷 森本 香住 同 奈ら原
仁右衛門 仁兵衛 定七 勘助 孫兵衛

一 山之中栗尾弥兵衛・中山六平請

同村 同村 出合 天谷 赤花 新宮
弥兵衛 甚八 磯八 利平二 喜五郎 佳四郎
未ノ五月

一三 肴問屋結成認可 (文政六年五月二十九日)

肴問屋
魚屋
同
塩屋
与吉郎
五左衛門
万兵衛

同
魚屋 十兵衛
桐野屋 伝兵衛
魚屋 吉三郎
次郎平

肴屋惣代

米屋 与七
桐野屋 庄左衛門

右之面々、左之通議定を以、此度肴問屋相願候付、
任願候其旨、相心得相調可申事

一 問屋場ニおみて日々之相場を以肴毎ニ正札を付

商ひ可申事 但、正札無之肴は相調申間敷事

一 店売之肴者現銀払者正札之外四步増、得意先掛

売は七か祢八か祢ニ直し受取候事

一 町方振売者都而現銀八かねニ直し商ひ候事

右之趣各々向々江可被相達候、以上

五月二十九日 酒勾清兵衛

御目付中

二三 豊岡着商人出石領内行商解禁

(文政六年七月二十七日)

左之通御目付江申談、

豊岡町

着商人共

右御城下江罷越着商ひ不相成様、先達而差留置候処、

右ニ而者多人數之者渡世難相成、難渡之趣相聞候ニ

付、以前之通罷越し不苦候、尤当町着屋とも儀茂是

又以前之通売買可致旨申談候事

右之趣御家中江各々寄々可被相達候、以上

七月

仙石主計

御目付中

二三 産物札通用促進令(文政六年十月二十九日)

左之通御目付江申談、

産物会所より差出候銀札、近来何となく通用不宜趣

相聞候、右者銀札同様引かへ等致し候義ニ付、無心

得違可致通用候、

右之趣町在江相触候間、為心得御家中江各々寄々可

被相達候、已上

十月廿九日

酒勾清兵衛

御目付中

三三 煙草問屋廢業認可(文政六年十一月二十一日)

一 御郡奉行達、

本町

油屋

仁右衛門

右去年烟草問屋奉願候処、存外荷物出數多中々少々

元手ニ而勤り不申難波ニ付、問屋御免之儀相願候由、

故障も無之候ハ、任勝手候様申談、

三七 他所銀札通用禁止令(文政七年二月七日)

一 左之通御目付江申談、

他所銀札通用致間敷旨、前以申触置候通心得違無之

様可致候、近来他領ニ而米札通用有之由相聞候、万

一心得違取斗等致候もの於有之ハ、吟味之上急度可申付候、小役等江も其旨申付置候間、兼而其心得可罷在候事右之趣町在江相触候間、為心得御家中江各々寄々可被相達候、以上

二月七日

仙石左兵衛

御目付中

三六 産物会所生糸集荷強化令（文政七年）『高柳村御用帳』

八鹿町中央公民館蔵

町在

糸持並糸買共へ

一 産物方糸売買之義者（儀以下同）兼而先年も御郡中村々へ申談候通、当年々者年々糸時ニ至り糸まゆ出来高村々庄屋ニ而取調書付を以大庄屋所へ差出し御代官へ可申達候、并鑑札持商人へ其村々々売捌候糸高も同様相調可申達候、

一 糸之義者御領内産物第一之義故、先年来（念所脱之）産物を建

立、鑑札之義被仰出候義者他領ニ散糸ニ相成候而者御国益金銀不融用ニ相成、自然御領分中難渋ニ押移候事故、格別之御世話被仰付候所、何となく心得違いたし、村々糸持之もの者鑑札持商人江売捌候得は下直之由相心得候趣ニ相聞候、右者全鑑札持商人方取扱不宜義有之哉と被存候、右者相互ニ難渋無之様取斗可申候、若不都束之義取斗有之候ハ、吟味之上急度可申付事

一 糸売捌之儀鑑札（持脱之）商人之外并他領ものへ売捌候事堅ク

停止申付置候所、無鑑札ものへ扱売致趣共相聞、不届之至ニ候、右者鑑札行司鑑札商人等致吟味、早速可申達候、尚糸時ニ至候得者小役差出し吟味申付候間、相互ニ見のかし隠置候もの同様急度可申付候、一 鑑札運上高料ニ付小商人共無抛売買相止メ難渋之趣相聞候、依之当年々鑑札之義格別御詮義を以運上御引下ヶ銀五両ニ被仰付候付、以来他領而已糸買致候もの共も御領分中之もの無鑑札ニ而糸商売停止申付

候間、早々大庄屋所へ鑑札可願出候、若シ違乱之輩有之、無鑑札ニ而糸商売致候へ、鑑札行司鑑札商人よりも早束可申達候、吟味之上見のがしニ致居候者^(速)同様急度可申付候、尤村々庄屋ニ而糸売買致し候商人来十五日迄ニ致吟味、人別取調御代官へ名前可申達候事

一 鑑札持商人之もの産物会所ニ一向ニ糸荷物持出不申もの共有之、右は糸時迄吟味之上急度可申付候、当年方改かん札引渡し商人共已来心得違無之候様可致事

一 先年来申付置候通、鑑札之義大庄屋所へ可願出候、当年方殿敷申付かん札行司かん札商人取之義大庄屋所へ申付候間、急度可得差図候、右之趣可申渡候事

申五月

一村内銘々手取糸まゆ何程

一 右之内何程売払、右之趣村内人別ニ相改可申達事

三三 他所銀札通用禁止令(文政七年六月十日)

一 左之通御目付江申談、

他所銀札致通用間敷旨前以申触候処、近来取引致し候者有之趣相聞、不埒之事ニ候、以後取引致し候もの於有之者、早速召捕候様小役之者江申付候、且所持之銀札取揚、其上急度咎可申付候、其旨可相心得候、

右之趣町在江相触候様申談候間、御家中ニ而も心得違無之様、各々寄々可被相達候、以上

六月十日

岩田静馬

御目付中

三四 錢小切手発行(文政七年九月朔日)

一 左之通町在江相触候様兩奉行江申談書を相渡ス、

近来錢并小銀札置候者有之哉、通用払底ニ相成如何敷事ニ候、右体之者有之候へ、相糺候上急度咎可

申付候、右ニ付一統難渋之趣相聞候、為融通左之通
之錢小切手差出し候間、通用いたし候様町、在江可
被申触候、

錢七文

同五文

同三文

一四 薪払底ニ付、御林ニ而薪払出(文政七年十月十三日)

一 左之通御目付へ申談、

此節薪払底ニ付木懸場へ前夜を為出売罷出、其上木
懸を越調候向も問々有之哉ニ相聞候、以来朝五時を
罷出順番ニ相調可申并木懸場を越調候(儀)以下同義者可為無用
候、尤薪差問難渋之向相對を以にう木調候節者何村
何某々にう木何程相調何日ニ入候段并木掛所江相断
人差出置相改調可申事

但、船ニ而罷寄候節ハ舟場舟下ケとも可為同様事

右之趣町方へ相触候、御家中之義も同様相心得候様、

各々可被相達候、以上

十月十三日

岩田静馬

御目付中

(中略)

一 薪払底ニ付雑々谷之内権現山御林ニ而御家人并町方
之者望之ものへ薪被下候間、明後日より勝手ニ刈り
取候様、尤追而冥加銀差上可然旨、御用人共申達候
付右通御許容有之、可然旨御用人へ申談、則御家人
江者御普請奉行より申談候様同人へ申談、町方江ハ
町奉行を申談候様、是又申談、

但、御家人町方之ものハ谷を分而刈らせ可然旨、右刈候
内者猥リニ無之様、小役之者付置可然旨御用人へ申談、
一 御家中へ薪望之面々江者追而山林方ニ而刈候上積置、
薪山出之直段上納ニ而被下可然旨申談置、

一四三 産物札回収予告(文政八年五月)

一 左之通御目付江申談、

産物会所方差出候切手札、銀札同様致通用來候処、
近來紛敷切手札有之趣相聞候ニ付、近々銀札ニ引
替可相渡候、尤日限之儀ハ追而可申付間、其心得
罷在可申事

右之趣町在江相触候間、為心得御家中江各方寄々
可被相達候、以上

五月九日

岩田静馬

御目付中

(以上五月九日)

(中略)

此間申談候産物方切手札、來ル十四日朝五ツ時方於産
物会所終日銀札ニ引替候間、御家中并未々迄所持之面
々ハ同所江差出引替可申、尤右日限之外差出し候共引
替無之事

右之趣御家中江各方可被相達候、尤支配々へも申聞候
様、是亦可被相達候、以上

五月十一日

岩田静馬

御目付中

(以上五月十一日)

一四 産物札回收(文政八年六月二十一日)

一 御用人達、

御家中町在寺院并他所産物札引替都合左之通之由

式百五拾八貫八百六拾六匁

外ニ

四貫九百式拾六匁

一同達、

産物札引替ニ付、摺立銀札左之通之由、

三万八千五百八十七枚 拾匁札

四万八千式百八枚 五匁札

九千四拾枚 壹匁札

九万五千八百三拾五枚

一四 産物会所閉鎖予告

『米里村御用帳』

八鹿町中央公民館蔵

一 産物糸問屋商ひ糸代売仕切三十日限之事

一 引宛貸付之義者^(參)当年休之事

右之趣末々迄不洩様可相心得候者也、此段御郡中へ可被申聞候、以上

^(文政八年) 西六月

稻垣源五左衛門

酒井兵太夫

芦沢清藏

一 翌 札場引当金引請御頼^(文政八年九月十二日)

一 今日名主大庄屋御用達之者共呼出、左之通申渡有之候之由、御勝手方懸り方演説有之、

名主 小左衛門・惣左衛門・茂兵衛・才助・半左衛門・

六郎兵衛

庄屋 ^{不參} 又三郎・忠右衛門・仁右衛門

大庄屋 市郎右衛門・新兵衛・岡右衛門・左衛門・新兵

衛・善太郎・次郎兵衛・太郎左衛門・又右衛門・

勘輔・弥吉・又左衛門・半左衛門

御用達 森尾村源太夫・同源造・口小野村彦左衛門・広谷

村庄左衛門・又次郎・九兵衛・中米地村忠^{不參}右衛

門・網場村太兵衛・一日市村次郎兵衛・訓谷村忠^{不參}

助・竹野村弥三郎・午三郎・赤花村八兵衛・栗尾^{不參}

村^同弥右衛門・清太夫・養父市場八郎右衛門・伊佐

村直次郎・藏垣村孫兵衛・夏梅村三郎兵衛・加保

村小左衛門・上郷村三郎兵衛・森本村四郎右衛

御用達 米屋次郎左衛門・鍋屋惣兵衛・茜屋善左衛門

四拾九人内十人不參

但、一日市村次郎兵衛ハ別、御目見ニ付御城代之

間ニ而取斗ハ外同様、

右之通大書院三之間江並居仙石造酒・青木与惣二之

間中程ニ罷出^(中略) 演説、

御吸物御酒御中皿御小蓋鉢肴一汁香の物三菜被成下

右相濟、左之書付兩奉行方夫々相渡、

一大坂七軒銀主江御頼談之義^(參以下同)ニ付、拾式人之御用達共

江申談之一条、

近年来御勝手向御不手繰ニ相成、追々御借財相嵩、其上札場引替手間ニ付、近々之内大坂七軒之銀主呼出、其方共と致会谈、借財方趣法并札場引替手間無之様相頼度、

然ル上者今般大坂銀主得心不得心之事ハ其方共取斗次第と存候故、一段骨折調談ニ相成候様取斗可申事

一 今般大坂銀主ヲ為致出銀、右を以札場へ致引替、銀歩引直申度候、都而其方共引請異候者而ハ大坂不都合ニ可有之哉、其節拾貳人相揃致出張、品能致相談度候事、勿論此銀子聊も御勝手方江取用申問敷事

一 札場引直し度ニ付、其方共江可相渡三十年賦之儀、戊亥

子三ヶ年延引相頼来、来丑年ハ相渡年度候事

一 札場引替銀大坂御借入ニ付、右御納入之処江三百匁懸六拾人講十組御頼、名主大庄屋共江被仰付候、尤其方共引請印形相頼度事

一 札場引替銀相談調候者、町在拾貳人之内ハ壱人ツ、当番を立引替場江致出張、引替銀札相改、札場御役人共江差出し可申候、右引替札ハ焼捨被仰付候事

一 当年ハ御取納米之内七千石ツ、其方共勝手之所ニ而相渡可申候、右を以大坂登セ銀丑年ハ之三拾年賦割渡可申事

一 去ル午五月被仰出候御用銀見付割、不納有之面々者先達而式ヶ年半分以上納仕候もの共ニ准し、来十月限り急度皆納可仕事

一 高懸り受候ものともハ相応之見付銀も懸り、兩様上納之義ニ付、高懸り之口暫上納御猶予被仰付候事

一 軒別割之もの共難波之内ハ割合通り上納致し候もの共ハ奇特之事ニ候、且聊も上納無之もの共ハ不埒之義ニ付、可被及其御沙汰処、今般格別之以思召、一同暫上納御猶予被仰付候事

一 去ル文政二卯年於郷方組立被仰付候式百五拾人講上ヶ銀之分、此度思召を以御差下之事

一 去ル文政六未年二月廿七日後御用銀皆納并式ヶ年半分以上納之向江者御褒美被成下候事

一六 他所銀札通用禁止令（文政八年十一月九日）

他所銀札通用致問敷旨、前以申触候義、^(儀)間々心得違之もの有之趣相聞、其上他所銀札ニ歩合を付取遣り致し、或金銀ニも歩合を付売買候もの有之由相聞、如何敷事

候、向後不相用もの於有之ハ糺之上重キ咎メ可申付候、

若又右体之儀及見聞訴出候ハ、御褒美被成下候事

仙石主計(下略)

十一月九日

一四 色替え新銀札との交換令(文政九年十一月十九日)

一 左之通兩奉行江申談、

町方江

御郡中江

一 近年御勝手方御差間ニ付、銀札引替御手当銀御心外

ニ行届兼、銀札追々不融通、下分一統難渋之趣相聞

候所、此節弥增御不手繰ニ付、引替不被為行届、仍

而大坂御館入之者江引替御頼被成候得ども、是迄連

年莫太之出銀故、承知無之候得共、此儘被差置候而

ハ下分弥難渋之趣ニ付、御郡中町方加入銀差出、御

返濟方ハ御家中御扶助之内御借受を以御返濟可被成

旨、達而御頼込ニ付、無拠御頼筋之处、今般別紙之

通、割合を以致引替候間、一統可為迷惑候得共無御

抛御取斗筋恐察仕、其旨可相心得候、

一年来致通用来候銀札之義(應以下同)、引替切ニ相成候而ハ可為

差間ニ付、大坂御館入之者江引替元御頼被仰入、色

替新銀札被差出候間、右新札拝借仕度面々ハ申出候

者四ヶ年分六歩方銀札御預り高ニ応し御貸渡可有之

候、右御貸付新銀札之義ハ正銀式步入ニ而致引替候

間、古来之通用候事

一 当时町在共所持之銀札、来ル廿一日夕田結庄町産物

会所引替場へ可差出候、引替罷出候儀者、町方ハ一

町限在方者一村限、役人方江取集メ、混雜無之様引

替、小前之もの夫々江明白ニ取斗可相渡候、尤拾貫

匁以上所持之者、自身可持出候、并町方ハ名主庄屋、

在方ハ一村限、村役人共明細ニ人別小前帳可致持參

事

戊十一月

別紙 五ヶ年平均 五割壹歩七厘七毛

壹匁札 銀五分壹厘七毛

凡高
札壹貫匁 壹貫目分 五百十七匁七分ニ相成ル、

内

四百匁 此金貳兩三步と三匁六厘八毛

残而
六百匁

内

亥年

百五拾匁 此金壹兩仁朱ト壹匁八分七厘五毛

子年

百五拾匁 此金壹兩仁朱ト五匁八分貳厘八毛

丑年

百五拾匁 此金壹兩壹歩ト貳匁八厘三毛

寅年

百五拾匁 此金壹兩壹歩ト六匁九分八厘五毛

金四兩三步ト拾六匁七分六厘五毛

此銀三百貳拾五匁五分壹厘五毛

此所江

新銀札三百三拾貳匁貳厘 但、貳歩入

十一月

一 御家中江左之通申談候様御目付江申談、

右之趣町在江申觸候、御家中も同様之義ニ付、所持
之銀札引替ニ差出可申候、尤引替ニ付而ハ手間可有
之候間、当七月御渡方壹度分高新札拝借可被仰付、

上納之儀ハ追而可被仰出候、

右之趣御家中江各々可被相達候、

仙石主計

十一月十九日

御目付中

一 〆 五月渡り渡方延引 (文政十年閏六月十九日)

一 左之通御目付江申談、

御勝手方御不都合ニ付、五月渡り御渡方御延引之処、

當時別而御差間聊之御繰合も不致出来候付、乍氣之

毒七月御渡方共暫不相渡候事

右之趣御家中江各々可被相達候、以上

閏六月十九日

御目付中

山村 貢

一 〆 藩借金総額公表 (文政十年九月十五日)

御勝手向之儀、近年必至と御難渋ニ被為至候処、一同

厚觀察仕、既ニ先達而上米等御頼被遊、尚又御充行之内差上格別之不願難渋をも、取統御奉公遂精勤候段、御満足被思召候、然ル処當時之御成行御借財高莫太之儀并御家中下々御扶助米等も当月々御城米無之、御買入等ニ相成候様之儀、其上当年之御收納米等も別書之通銀主江御渡之御約定ニ相成居、当季御取統ハ勿論下々御扶助之処も不被為行届、甚御不安堵御心配ニ思召候、依之御借財高別紙之通致内見候様被仰候、猶又一統心得も可有之儀、右ニ付此上御取直し取斗方心付も有之候ハ、書付を以、明後十七日出仕之上可被差出候、尤心付無之面々ハ不及出候事

九月

覚

一 銀五千百三貫三百四拾八匁
三分七厘

大坂館入七軒并四家共御借財高

一 同百貳拾貫匁

京都口御講銀借共

一 同貳百六拾三貫匁

同御名目銀口々

一 同千三百貫匁 金ニノ貳万兩 江戸御借銀

一 同六百貳拾九貫四拾八匁 近国御借入

九分三厘

一 同千九百六拾壹貫八百 地向御借入

三拾三匁七分

一 同百拾壹貫匁 御代官口

一 銀百貳拾三貫七百 五ヶ年賦口

六拾三匁七分七厘

拾ヶ年賦口

一 同千九百九貫八百七拾三匁 三拾年賦口

四分九厘

他所地向共

一 同九拾貳貫匁 札場貳分方

惣ノ 銀壹万八百拾三貫八百六拾八匁貳分六厘

金ニノ 拾六万六千三百六拾七兩余

一 米貳万三千七百八拾五石程 当御收納之内御借財御引

当ニ相成居候事

外ニ

一 銀八百貫匁 去冬古札引揚手当銀

一 同五百貫匁 当益前々新札引替手当

一 同三百五拾貫匁程 古札書替札引替手当

千六百五拾貫匁程

一 銀貳百五拾貫匁程

当六月夕御才寛銀口々

口々惣銀老万貳千七百拾三貫八百六拾八匁貳分六厘

金ニッ 拾九万五千五百九拾兩余

一五〇 麵類屋仲間冥加銀上納 (文政十一年二月二十一日)

一 町奉行達、

麵類屋共

右例年之通冥加銀老枚上納仕候由、右御勘定奉行江相廻し候様申談、

一五二 銀札加印作業見廻り (文政十一年五月二十一日)

一 今般銀札御加印被仰付候処、先例之通御加印と申候得者御大造ニも相成候付、表立而者不被仰付、左之通御勘定所江罷出候様於別席夫々申談、右ニ付御目付江為知、書付不相渡、

申合老入ツ、朝夕見廻り可申事 御用人

申合老入ツ、見廻り、

御郡奉行

申合老人不明様相詰可申事

御勘定奉行共

御勘定所詰共

一 右之御趣意ニ付、御徒士組之内御加印押と無之御勘定所手伝加り被仰付候上、御取及并御勘定所手伝共ニ打込ニ相働候様申談候間、御徒士五人人別相選御勘定所手伝加り申談候様、御用人江申談、

但、右者一昨戌年新札出来之節右之通之処、表立不被仰付故、其節之儀日記ニ留無之ニ付、右之通申談、并御取及御勘定所ノ手伝江茂右勤方之儀申談候様、御勝手方御用人江申談、但、下摺者相濟居ニ付、御加印斗也、

一五三 新宮涼庭手代来訪 (文政十一年十月十八日)

一 扇子箱一ツ、差上之、

京都十一屋 権兵衛

手代 清助

京都医師 新宮涼庭

手代 田辺 橋本藤右衛門

右此度御勝手方御用向ニ而罷出候付、御対面所江被

招呼、御料理被成下、御料理中静馬・貢罷出及挨拶、

一 左之通被成下旨申渡候様御用人江申談、三ツ折相渡、

拾人扶持 御役ニ付御羽織 京都医師 新宮涼庭

拾人扶持 御紋付上下 同所十二屋 権兵衛

金三百疋 涼庭手代 藤右衛門

同式百疋 十一屋手代 清助

一五 他所銀札通用禁止令（天保六年八月十一日）

一 左之通町触差出、尤町在江も相触候様、両奉行へ申

談、書付両通相渡、

他所銀札致通用間敷旨、前以申触候処、近来心得

違之者も有之哉ニ相聞如何敷事ニ候、以来心得違

之者於有之ハ相糺急度可申付事

一西 産物会所ニ関する触書（天保十一年）『米里村御用帳』

八鹿町中央公民館蔵

今般御改革ニ付札場・産物方懸り引請被仰付候ニ付

而ハ以来格別遂心配、当国之産物ハ養蚕之義第一ニ（感以下同）

候間、御領分ハ素カ一国之利益カ一段相増候様大坂

引請之面々へ得斗申談、強キ産物会所利益筋而已ニ

不拘、下分都合宜様取斗、他所向へ利益筋相運候様

ニ而ハ畢竟産物会所衰微之基ニも可相成ニ付、此上

不締筋之義無之様、法度之義嚴重ニ取斗、融通筋之

義ハ精々手広ニ相成候様專要ニ可相心得候、

先年カ格別之御趣意を以産物会所建置、下分為融通

糸穀物類其外国産之品々引当、御貸付有之来候処、

近来不手繰ニ付、御自力行届兼候得共、下分不融通

之処も御厭被遣被下、今般大坂表江対談を以、当六

月カ以前の通月割老步五厘之利息を以金銀札望之品

御貸付有之候間、格別之御趣意厚相心得、国産之品

産物会所江相運差入拝借銀致し、他国他領筋江利益

相失候義無之様取斗、時節相場見斗、一統得利潤候

様専要之事

五月朔日

4 お家騒動関係人事

一 仙石左京御鳥屋拝借 (文化十三年二月十三日)

一 大殿様方御鳥屋拝借被仰付、今朝方野

間江罷出候段、申達有之、右ニ付別段 仙石左京

御暇ハ不相願候由、

一 仙石三次久長隱居宅完成 (文化十三年四月二十五日)

仙石左京

一 同姓三次、下馬場町拝領地江以御陰家作出來ニ付、

今日引移難有旨御礼申達有之、

一 仙石造酒助勝手方懸り退任 (文政三年八月七日)

一 思召被為在候付、御勝手方懸り御免 仙石造酒助

右之通被 仰出旨、於御用部屋仙石左京方申渡有之、

奉恐入候旨御請申達、

一 御勝手方懸り 岩田静馬

右之通被 仰付旨、今日出仕見合ニ付、左京方奉札

を以申渡有之、

一 是迄一統御勝手方懸り被 仰付置

候処、彼是心配り相勤太儀被思召候、御用人共

今般御勝手方懸り無滞御免被遊、

一 御勝手方懸り被 山村 貢

仰付候、時節柄之義、万端

入念致出精相勤候様、

仙石 操

右之通被 仰出旨、於御用部屋申渡也、

仙石造酒助

一 右今日被 仰出之趣奉恐入差扣早川忠左衛門を以相

伺候付、即刻不及其儀旨申渡、御礼申達、

一五 仙石左京勝手方懸り頭取就任 (文政四年四月一日)

一 (三ヶ年之間)

御勝手方懸り頭取御頼、

仙石左京

右之通、被 仰付旨、江戸表方奉札を以申来候段、

御用番申渡、奉札相渡候処、奉畏候、御請申達有之、
但、左京席柄ニ付、御用番右席江相懸申渡、

一五 宇野甚助召出し (文政四年四月七日)

一 左之通被仰付旨、於御用部屋申渡、

被召出

御宛行拾石三人扶持被成下、御郡奉行 出席

孫太夫せがれ

御小姓組次席御用人支配 宇野甚助

平勘定出役 孫太夫出坂留守ニ付

名代

御勝手方認物懸り 浜田紀内

一六 仙石左京大老職就任 (文政四年七月二十九日)

一 左京御目見相濟、御椽頼例席江着座候、御年寄共御

目見、御椽頼例席着座之上、

仙石左京

右被為 召二之御間、一疊目罷出、依 御意、一之

御間内江入候上、段々御熟意之上御大老職御勝手方

掛り頭取是迄之通被 仰付、御請御札申達有之、

御手自御長熨斗被成下、御札申達相濟、元席江帰座、

一六 仙石左京勝手方懸り退任 (文政六年九月朔日)

一 御目見例之通、左京方居残何れも退座、

御勝手方懸り頭取無滞救免、

仙石左京

右被為召御熟意之上、右之通被仰渡候段、御用番

江御札被申達、

御勝手方懸り

荒木玄蕃

仙石造酒助

御勝手方懸り無滞御免

仙石左兵衛

右御側御用人を以、切々被為召、御熟意之上右之

通被仰渡候段、御用番江御礼申達、

但、左兵衛儀ハ御用番ニ付、支蕃江御礼申達、

一三 殿様御不快ニ付、重臣ら急出府（文政七年）

五月八日（御用番 仙石左兵衛）

殿様御不快ニ付、為伺用意次第

立歸出府、

仙石左京

但、せかれ新之助召連罷越候段、申達有之、

一 右ニ付左之面々拝借被申達、則御用人申談候様申談

之、

宇野甚助

本間佐右衛門

小林沢之助

付添出府之旨申達有之、

昇兵衛せかれ

櫻田軍次

荒木玄蕃

一 右引込中ニ候へ共、殿様御不快御付被為在候旨申来候付、長髪ながら押而出仕、

一（殿様御不快ニ付為伺御容体、立歸出府、用意次第出立、御目録銀式枚被成下、

御小姓頭出座
小泉洞春

五月九日

一（江戸表へ今晚出立致し候段、申達有之、

仙石左京

但、せかれ新之助召連出立、
一（殿様御不快ニ付御用向有之、
支度次第立歸出府、

酒勾清兵衛

五月十日

一 今朝江戸表へ出立致し候段申達

酒勾清兵衛

○政美は五月三日に死去するが『御用部屋日記』には、

七月廿一日の項に記載される。

七月廿一日

一 江戸表当月十四日午ノ中刻出、道中仕立飛脚五日限丹波路時廻し差込、道中所々川支ニ而夕八時過相違候処、殿様御病氣追々御勝不被遊、御差重候付、道之助様江御養子御跡式御相統之御願書被差出、依之当月十三日大御目付岩瀬伊予守様為御判元改被成御出無御滞相済、右御願書御用番松平和泉守様江秋月筑前守様御持参被差出候処、無御滞御請取相済候旨、然ル処御療養種々被尽御手候得共御養生不被為叶、

同十四日晝寅ノ下刻御逝去被遊候段、乍去此節上々様御障等被為在旨、御用向左之通申来、(後略)

一三三 仙石雅次郎出府(文政七年六月)

一 雅次郎様此度江戸表江御引越之処、御幼年様之御儀ニ付、表向ニ而女中被召連可宜哉ニ候へ共、御先例も無之、公辺向之処難相分、依之渡辺喜左衛門妹分ニ而御閑所罷通候御手判御頼之御書御自積を以相認可然哉之旨、御書翰役江申談候処、出来差出一覧之上前々之通京都山内弥藏方江申遣候様申談、并江戸表御書翰役江茂委細及通達候様申談、
一 筆啓上仕候、弥御堅固被成御勤役珍重奉存候、然者私家来渡辺喜左衛門と申者之妹式人并下女四人此度從在所江戸江引越申候、今切御閑所罷通候御手判申請度奉存候、依之右從喜左衛門証文可差出候間、可然様奉願候、右之段為可申上如斯御座候、

恐惶謹言

五月廿五日

御名

内藤紀伊守様

参人々御中

一 渡辺喜左衛門持参、御所司代江差出候証文、御書翰役差出し一覧之上差戻ス、案文左之通、

女上下六人但、乗物老挺、從但馬江戸屋鋪江差遣申候、是者仙石美濃守家来渡辺喜左衛門と申者之妹式人並下女四人ニ而御座候、今切御閑所無相違罷通候御手判被成下候様、被仰上可被成下候、若此女ニ付以来出入之儀御座候者私罷出可申明候、若為後日、仍而如件、

仙石美濃守内

渡辺喜左衛門

文政七年六月

内藤紀伊守様

御家来中

(以上六月八日)

一 左之通被仰付旨切々於御用部屋申渡之、

今般雅次郎様御用意次第江戸表江 御内所懸リ
御用人 原五郎右衛門
御引越被遊候付、立掃御供、

右同断

御内所惣御り
渡辺喜左衛門
御目付
河合惣藏

右同断

御近習番
谷津隼雄
御駕脇相勤可申事
乘竹 弼

右同断

御馬廻り
金沢半藏
山路又平
御歩行供相勤、
河野勇助

右同断

田中伊兵衛
杉立章庵
(以上六月七日)

一六 仙石左兵衛年寄役罷免 (文政七年六月二十七日)

一夕七時御用番於岩田静馬宅、荒木玄蕃・仙石造酒助

列座御用人磯野源太左衛門侍座、御目付小川八右衛

門立会、左之通静馬申渡之、

仙石左兵衛

病氣ニ付名代

山田二郎八

御自分義(殿)今般御役御免、御城代席被仰付、在勤中三百石高被成下、年頭五節供玄猪出仕、其節御城代之間江相詰候様被仰出候事

一七 仙石左京大老職罷免 (文政八年二月九日)

一左之通於御用部屋御用番申渡之、

仙石左京

出仕見合ニ付名代

仙石造酒

御自分儀今般御大老職無滞被遊御赦免、是迄出精被相勤候付御大老上席、年頭五節供月次出仕見斗被致退出候様被仰出候事

一八 仙石造酒ら年寄役罷免 (文政九年九月二十七日)

一今七時御用番仙石主計宅ニ於て、岩田静馬列座、御

用人堀七郎兵衛侍座、御目付堀半兵衛立会、左之通切々主計申渡之、

思召被為在候付御役御免、御用人席、折々出仕之節御用人部屋江相詰可申、
名代酒勾清兵衛
青木彈右衛門
并差扣被仰付候事

但、惣而御用人と一所ニ罷出不申事

今般御役筋之儀ニ付無抛趣を以御役御赦免之儀相願候付、願之通御役御免被磯野源太左衛門遊候、乍然御役願方不行届儀共有之、
名代本間市左衛門
如何敷被思召候、依之慎被仰候事

思召被為在候付、隠居塾居被仰付候事 桜井良藏

思召被為在候付、御役御免、御普請奉行席

惠崎又左衛門

思召被為在候付、弘道館勤御免、組席山田熊太郎次、惣次第本間源次兵衛次、
酒勾 薫
御広間江番入、

思召被為在候付弘道館勤御免、父良藏儀思召被為在隠居塾居被仰付候処、祖

父俊藏儀在勤中之儀被思召、格別之以御仁恵、家督拾五人扶持被成下、御小姓組式番組へ組入、組席惣次第共川口長右衛門次、

桜井一太郎

一 今七時御用番代岩田静馬宅ニ於て、御用人大森登侍座、御目付谷野猪右衛門立会、左之通静馬申渡之、

思召被為在候付、御役御免、席是迄之

通、折々出仕之節御用部屋江相詰可申

事并差扣被仰付候事

名代仙石造酒
服部弥兵衛

但、席是迄之通御城代之間詰可被仰付、

此度詮儀不行届、

御用部屋江相詰候様被仰付候付、以後別ニハ難相用候事

○造酒は十月十九日に死去。

一七 仙石左京政權復帰（文政九年十月二十五日）

一 左之通被仰付旨於御用部屋申渡之、

折々出仕、御政事向大要之處相心得可申事

仙石左京

但、席柄ニ付御用番左京席江罷出申渡

御加判之列

勤役中三百五拾石高被成下、

大森 登
山村 貢

一六 融資組織不成立に関する処分（文政十年五月）

一 差扣従是可及差図旨、

仙石左京
岩田静馬
大森 登
山村 貢

右先般御勝手方之儀ニ付、御用違九人之もの江御任

セニ付致連印候処、御破談ニ相成、恐入差扣相伺候

ニ付、右之通申談、但、左京江ハ席江罷出申述べ、

（以上五月十七日）

青木弾右衛門

○同文にて翌日申し渡される。

一 今七時於仙石左京宅、岩田静馬・山村貢列座、御目

付浅村治右衛門立会、左京申渡之、

御勝手方取斗不行届儀有之、御
役願之趣不容易事ニ候得共、被
為在思召候付、願之通御役御免、
百石減知、格別之家筋之儀付、
席是迄之通、折々出仕、御城代
之間江相詰可申事

仙石主計
名代
御用人席
磯野源太左衛門

一 今七時於御用番青木弾右衛門宅、大森登列座、御用

人本間市左衛門侍座、御目付間中連立会、左之通切

々呼出弾右衛門申渡之、

御勝手方懸り

思召被在候付、願之通御役御免、

御使番格

御小姓頭御用人兼帯
服部弥兵衛
御用人
竹村 丹解

右同断、席御近習番次、

去冬封札取斗不都束之至如

何敷儀ニ被思召候、依之懐

被仰付候事

御物頭
御勘定所詰御勘定奉行
堀 源太夫

右同断

席御近習番次、

御物頭格
御郡奉行御勝手方懸り
稻垣源五左衛門

右同断、席御近習番次、

去冬封札取斗不都束之至如

何敷儀ニ被思召候、依之慎

被仰付候事

御長柄奉行格

御勘定詰御勘定奉行

竹村次郎右衛門

右同断、御馬廻三番組江組入、

組席惣次第共岩波札次、

去冬封札取斗不都束之至

如何敷儀ニ被思召候、依

之慎被仰付候事

御蔵元席

御取頭取
重田甚五兵衛

右同断、御小姓組沓番組江組入、

組席村山茂次、惣次第下川

新助次、

右同断、慎被仰付候事

御馬廻り

御取頭取
芦沢清蔵

思召被為在候ニ付御役御免、

右同断、慎被仰付候事

御小姓組

御取頭取
井上藤兵衛

(以上五月十九日)

一六 河野瀨兵衛隠居・蟄居(文政十年六月十四日)

一 今七時御用番大森登宅ニ於て青木弾右衛門列座、御

用人杉原官兵衛侍座、御目付浅村治右衛門立会、登

申渡之、

河野瀨兵衛

御自分儀思召被為在候付、隠居蟄居被仰付、格別之

以御慈悲、弟新太郎江家督三拾俵四人扶持被成下、

御小姓組沓番組江組入、組席惣次第共小出作平次被

仰付候事 三ツ折相渡、

一七 御用達ら処分(文政十年七月二日)

一 評席一座御役人達、左之通今夕於評席申渡候由、

先達而御勝手向引請之儀及御請、不

輕御規定書等頂戴相願、被任其意、

未能々之御用茂不相勤、早速御赦免

之義願出候始末、不屈之至リニ候、

八木町
米屋

依之名主格名字帶刀是迄被下置候御

米取上、追込之上家財并諸帳面封印

病氣ニ付
代万屋
半兵衛

先達而御勝手方引請之義及御請、不

輕御規定書等頂戴相願、被任其意候
美含郡一日市村
山田次郎兵衛代人

之処、能々之御用度不相勤、早速御
出石郡下郷森尾村
平尾源大夫代人

赦免之義願出候始末如何敷儀不届之

至リニ候、急度申付方も可有之候得
養父郡広谷村
長沢庄左衛門代人

とも勘弁を以不及其沙汰候、以来万

端入念可申事

先達而御勝手方引請之儀及御請、不

輕御規定書等頂戴相願、被任其意候
出石郡下郷森尾村
源藏代人

之処、未能々之御用も不相勤早速御

赦免之義願出候始末不届之上輕蔑之

致方重々不届至極ニ候、依之御用達
養父郡養父市場村
八郎右衛門代人

御免、大庄屋格并是迄被下置候御米

取上、苗字差留、追込之上家財封印

付申付候、急度相慎可罷在候事

(前文前者と同文のため略)依之御用
氣多郡新村
太左衛門代人

達御免、大庄屋格并苗字取上、追込

之上家財封印申付候、急度相慎可
罷在候事

一七 荒木玄蕃年寄役罷免(文政十一年六月二十七日)

一 今七時於仙石左京宅、岩田静馬・山村貞列座御目付

浅村治右衛門立会、左之通左京申渡有之、

思召被在候付、御役御免、慎被仰付、

席仙石主計次、折々出仕 御城代之

問江相詰可申事

格別之家柄之義ニ付、右之通被仰

付候事

荒木玄蕃
名代
荒木甚兵衛

一七 堀新九郎、新宮凉庭と交友(天保二年二月十五日)

一 疝積氣ニ付、京都罷在候医師新宮凉庭

方江為療養此節罷越、様子次第暫逗留

仕、模様ニ寄帰路之節播州北在家松野

一学方へ立寄、一両宿逗留、灸治為仕

度旨願書差出、受取置、

堀 新九郎

一七 仙石主計ら隠居・逼塞(天保三年正月二十二日)

一 左之通今夕七時於御用番山田八左衛門宅、岩田靜馬列座、御用人本間市左衛門侍座、御目付加藤四郎兵衛立会、八左衛門申渡之、

仙石主計

名代

河合庄左衛門

御自分儀思召被為在候付、隱居逼塞被仰付候、此上被仰付方茂有之候得共曾祖父伊織祖父内藏允儀格別出精候段被思召出、せかれ富太郎江家督千石被成下、幼年ニ付、当分五百石被成下候事

荒木玄蕃

名代

倉品老之助

御自分儀右同断、此上被仰付方茂有之候得共旧家家柄之儀ニ付、格別之以思召、せかれ信太郎江家督千五百石被成下、幼年ニ付、当分七百五十拾石被成下候事

酒勾清兵衛

名代

関口角右衛門

酒勾 薫

御自分儀思召被為在候付、隱居塾居被仰付候、此上被仰付方も有之候得共格別之以御仁恵、せかれ薫江家督式百五十拾石被成下、御馬廻り式番組江組替、但席弓削三郎上、惣次第園部角太郎次、御広間番是迄之通被仰付候事

原 市郎右衛門

名代

服部弥兵衛

原 敏郎

御自分儀右同断、隱居逼塞被仰付候、此上被仰付方茂有之候得共格別之以御仁恵、せかれ敏郎ニ家督式百五十拾石被成下、御馬廻り三番組江組替、組席堀源作上、惣次第酒勾薫次、御広間番是迄之通被仰付候事

一 逼塞之節当人慎方之儀相伺候処、御目付方ニ茂先例難相知候由、依之如何可申談哉相伺候付、左之通評義之上申談、

一 火事之節者蟄居之もの之通可相斗事

一 当人屋敷内徘徊は不苦、門外へ出候儀者不相成

候事

貸金出入

訴訟人

弁住

一 西 河野瀬兵衛追放 (天保三年六月十一日)

一 左之通於別席申渡候様御小姓頭江申談、

弥次兵衛父
河野瀬兵衛

蟄居被仰付置候処、思召被為在候付、離散被仰付候、

早々立退可申候、尤以後京都江戸并但馬・丹波・丹

後・美作、右国々徘徊被差留候事

一 五 江戸詰藩士らの貸金出入 (天保四年十一月二十五日)

乍恐以書付、御訴訟奉申上候、

増上寺所化

弁純代兼

右弁純寮ニ罷在候、

同寺山内通玄院隠居

天保三辰年八月証文
一金貳拾兩

相手

同 仙石道之助殿家来
借主 早川甚左衛門
会田岡太郎

天保三辰年九月証文
一金七拾兩

相手

同 仙石道之助殿家来
借主 会田岡太郎
早川甚左衛門

天保三辰年九月証文
一金三拾八兩

相手

同 仙石道之助殿家来
借主 増田七郎
石原新吾

天保三辰年九月証文
一金三拾八兩

相手

同 仙石道之助殿家来
借主 石原新吾
増田七郎

天保三辰年九月証文
一金七拾兩

相手

同 仙石道之助殿家来
借主 白井半十郎
会田岡太郎

合金貳百拾八兩

右訴訟人弁純代兼弁住奉申上候、前件之衆中動向要用ニ付、金子致借用度段達而相頼候間、拙僧共相続金用

立申候、尤証文面を以期月ニ御座候へ共相手之者通濟方難渋を申聞候間勘弁仕、刻濟ニ致遣、則三拾兩之分三ヶ年、七拾兩之分式口共三ヶ年半、三拾八兩之分五ヶ年季右何連茂年限中相手之者御主人之手当金請取書付拙僧共方へ預り置、尚又勘定奉行早川甚左衛門與印仕候儀ニも御座候間、手当金相渡り候節ニ請取候積對談之規定書甚左衛門を取置之申候、其余式拾兩者期月証文之通通濟之約定ニ御座候處、新吾・七郎分は金子七兩三分余請取候得共、其外相手之者当金不殘甚左衛門引留相渡具不申候、夫のミならず先月初旬甚左衛門・岡太郎・新吾・七郎右四人之者在所勝手ニ致発足候間、猶以掛合行届不申候、依之甚左衛門同役久保吉九郎江前書之始末及懸合候得共一円取扱具不申、誠進退倒惑仕候、無祿之拙僧共時節柄別而日用ニ差支路頭ニ相立候様成行、必至ニ難渋仕身分立行不申候間、何卒御威光ヲ以相手之者共江御理解被成下候而証文規定之通手当金勘定奉行を拙僧共江相渡、元利皆濟ニ相成

候様被仰付被成下度、偏奉願候由、

増上寺所化

弁純代兼

巳十月

右弁純寮ニ罷在候、

同寺山内通玄院隠居

弁住 ㊦

寺社

御奉行所

一 亥 江戸表御用人御側用人ら処分

(天保四年十二月二十五日)

一 左之通今七時於御用番青木彈右衛門宅、大森登列座、

御用人倉品老之助侍座、御目付江見久右衛門立会、

彈右衛門申渡之、

本間佐中

名代

本間甚右衛門

御自分儀重御役儀被仰付置候處、先般江戸表ニ於て麻見四郎兵衛此表江御用向被仰付候節、彼是不行届

不都束之始末如何敷事ニ被思召候、依之今般御役御免式拾石減知、御目付格被仰付候事

麻見四郎兵衛

名代 松居昇大夫

御自分儀於江戸表立帰御用向被仰付候節、彼是不行届不都束之始末其上到着之砌大殿様江不都束之儀共申上、重々如何敷事ニ被思召候、依之被仰付方も有之候得共以御慈悲不被及其沙汰、隠居被仰付せかれ弁之助へ家督五拾俵五人扶持被成下、勤方は迄之通被仰付候事 但、三ツ折相渡、

一七 神谷七五三罷免 (天保五年三月三日)

二月廿一日

神谷七五三

思召被為在候付與御付御免、席是迄之通、出石勝手用意次第引越、但、弟軼儀も召連候様、御用人を以申談候、

一八 神谷軼の召捕り依頼 (天保五年三月十六日)

一 左之御届書町御奉行御月番榊原主計頭様へ御留守居河野丹次持参差出候処、御請取之上御書替一通御渡被成候付、御非番筒井伊賀守様へ持参、御帳付被濟候之段、罷帰申達候、

御名家来

神谷 軼

当来四十一歳

右之者去ル廿五日出奔仕候処、不届之儀有之候付、尋申付見合次第召捕可申旨、若及異儀候者打捨ニも可申付候、為後日此段以使者御届申達候、以上

御名使者

河野丹次

二月晦日

一九 河野瀬兵衛尋問 (天保五年八月二日)

左之通相尋候処、相違無之旨申達候由、(郡奉行達)

一 其方儀去夏於江戸表差出候書類及尋問候処、詰ル所申答候者駈と証跡ハ無之、推察風説考等を以取拵書出候段及答候、右之通相違無之哉、

一 風説と申義其方当方ニ罷在候節手拵之家之事に候得者、隣家之咄さへも相聞へ門外往来之人々之噂又者

輕キ出入之者之咄等取束、推察風説考等を認メ差出候段及答候、右之通無之哉、

午八月

右御尋之趣相違無御座奉恐入候、以上

天保五甲午年八月二日

河野瀬兵衛 ㊦

一八〇 仙石主計ら入牢仰付 (天保六年正月二十六日)

一左之通被仰付旨大書院三之間ニ於て仙石小太郎列座、御用人井上三郎左衛門侍座、御目付田中伊兵衛立会、登申渡之、

御物頭

小倉武兵衛

御目付

磯野弥平治

平士

西山平左衛門
船越源吉

各儀仙石富太郎父主計江被仰付之儀有之ニ付、御使被仰付候、御書付之通相心得候様、書付相渡、

御物頭

佐久間正之丞

御目付

平士

各儀荒木信太郎父玄蕃へ同断、

御物頭

御目付

平士

各儀酒勾薰父清兵衛へ同断、

浅村治右衛門

真野作兵衛

一柳市右衛門

岩田丹太夫

鷲見久左衛門

堀 深作

柘植一兵衛

堀部善藏

船越源吉

真野作兵衛

一柳市右衛門

渡辺吉次郎

柘植一兵衛

工藤基太郎

白井庵之助

御小姓頭出席

右仙石主計・荒木玄蕃・酒勾清兵衛不屈之儀有之ニ付、出町困場江被遣候付、兩人ツ、昼夜不明様番被仰付候、御_レ筋無手抜相勤候様、被仰出旨、

但、右ニ付御広間御番御用捨之旨御目付を以申談、

一 御使之面々へ申渡相濟御書付相渡御受申達候上、主計・玄蕃・清兵衛(儀)、若御受違背之儀も有之候者、先格之通取計可申哉、伺之通相心得可申旨申談、且又被仰付之趣手控等も候ハ、申請度旨主計・玄蕃・清兵衛親類共申聞候者、相渡候様奉書半切ニ相認、三通相渡、

但、申渡御書付三通半切三通当朝為認可申処、長文ニ付、内々昨夕宅ニ而為認候事

一 主計・玄蕃・清兵衛へ申渡候上、御請仕候趣一応引取申達候而尚又罷越候様平土船越源吉・一柳市右衛門・柘植一兵衛江御目付を以申談、

一 御書付左之通、

仙石主計

其方儀去ル辰正月十六日大殿様江重役并役人共之内不政不直之趣、荒木玄蕃・酒勾清兵衛・原市郎右衛門申合徒党連印ニ而致上書候処、右者全ク讒訴之段御察覽被成、不屈至極ニ思召、早速御呼出御糺明茂可有之処、左候時者重科之御沙汰ニも相成、旧家家柄之儀不便ニ被思召格段厚御仁政ニ而被為在思召候趣を以、隠居逼塞せかれ富太郎江家督申付置候処、去々巳六月元家来当時浪人河野瀬兵衛構イ場所をも不憚江戸表江罷出、同姓共へ右上書同様其外自考并風説等取交文意相巧ミ讒訴害訟ニ及ひ、猶又同人姉甥生野地役人渡辺角太夫方不容易向江瀬兵衛同様申立、無余儀公辺御沙汰ニ茂相成、右ニ付無御抛去ル午正月十六日西御殿江御呼出、大殿様於御前先般上書之趣一々及尋問候処、聊訊立候答無之、不都束至極恐入候趣、或ハ廉忽之儀申上恐入候段、又ハ此上御慈悲筋相願候旨而已ニ而一言之申訳無之、全ク上を欺キ候大胆不忠不義之至、殊重役并役人共之内及

讒訴候始末、武士道不似合之儀、重々不屈至極ニ付
切腹可申付之処、先祖共代々之忠勤を存出、旁此上
廣大之仁恵を以死罪一等を下シ、剃髮之上国場を差
遣候、急度相慎可罷在者也、

未正月廿六日

荒木玄蕃

酒勾清兵衛

○仙石主計とほとんど同文につき省略。

一八一 石原新吾ら知行召放ち (天保六年四月八日)

一左之通今夕御用人井上三郎左衛門宅江親類共之内卷

人ツ、呼出、夫々申渡候様申談、

在京中不都束之義(儀)以下同共有之、被仰付方も

被為在候始末借財方御吟味筋之義有之

ニ付、先ツ知行被召放、暫之処為御繫八

人扶持被下置候、急度相慎罷在可申事

右同断、五人扶持被下置候事

石原新吾

早川保輔

一八二 石原新吾らに関する神社奉行よりの御尋

(天保六年四月九日条)

右同断、拾老人扶持被下置候事

会田岡太郎

右同断、四人扶持被下置候事

増田七郎

脇坂様方御尋ニ付、増田太市郎方差出候書面左之通、

乍恐御尋ニ付奉申上候

宛行高
一八拾石

勘定奉行
早川保輔

右勤役中役手取扱金多分引負、其外不埒之筋茂有之

候付、一昨巳年十月二日在所表へ差遣、親類共江預

申付、糺明罷在候、其外他借金莫太之儀(尤)ニ而不筋口

も有之、当時吟味中ニ而罷在候、

宛行高

同下役

同
一百石

石原新吾

同
一式百石

近習番役
会田岡太郎
同
増田七郎

右同様之始末不埒之儀ニ付、同年同月在所表江差遣、

右同様罷在候、然ル所出立後諸々他借金及出訴候故、

親類共打寄金子財覚仕、内済取組候得共、勘弁仕呉不申候分、当御役所初町御奉行所当時出訴之分五拾口余、其外内済取組候分凡金子高式千兩余も御座候ニ付、取扱内済行届不申奉恐入候、芝御山内弁住金談之義(後以下同)も元来通元院無尽講積金入講方借財罷出申候、右講企之節一ト口式兩式歩懸十口入講仕候得者、右講引当ニ而五拾兩用立呉候由ニ而、右懸金之義身薄之事故十口式拾五兩之処差出兼候ニ付、拾式兩式歩差出、跡拾二兩二歩掛金仕、殘拾式兩式歩は講元方差出、右金子江利足相加へ滿講之節引落算用可仕之約定ニ而十口掛二タ口、五口掛二タ口借用申候、借用申候方六会程差入申候処、右講は崩ニ相成り一錢も入手不仕、右借財金ニ者利足を加へ七十兩二タ口、三十兩二タ口証文ニ書直申候得共、懇意合之儀ニ付証文書遣候へハ右講金之儀者聊不申候得共、元来借用之手続御座候事故、段々勘定致呉候様相歎申候而右四人之者共始末相歎候得共、勘弁致呉不申、親類

取集内済金六拾兩差入可申掛合之処、段々之御理解奉恐入候付、猶金子財覚仕八拾兩迄増金仕、殘金者拾五ケ年賦之応対仕候処、利足之処式拾兩ニ付老歩之利足を相加へ不申候而者不承知ニ付、内済不相調候故、猶又利足礼金旁拾五年割済之金子一ケ年高跡三ケ年相加へ可申候間、勘弁致し呉候様申候得共不承知ニ付、当二ケ年相増合五ケ年丈ケ差入可申段相歎候得共、是以不承知、然者五ケ年を相縮右は五ケ年ニ割賦仕可申候間、何卒勘弁致呉候様相歎候得共、聊勘弁致呉不申、当時ニ而者辰九月方当未二月迄ニ利足を加へ三百廿兩余ニ相成申候由ニ而当金式百兩差出殘金之処廿五兩ニ老歩之利足相加へ不申候而者不承知之由ニ御座候、当金之処ハ最初とは相違仕候ニ付、親類之者共当惑仕候、猶此上数口之借財之事故、數前之処事相歎掛金居申候、乍恐御尋ニ付、右之段奉申上候、

三月七日

御名家来

増田太市郎

一八三 仙石左京の隱居願差戻し（天保六年五月二十六日）

一先達而仙石左京隱居願差出候処、此度御差図願書御戻しニ付、四時岩田静馬・青木彈右衛門御使を以、左之通被仰出候、

仙石左京

御自分近年多病其上去冬以来久々痲積氣ニ兼々被致全快候程も無覚束、仍而先比隱居願之趣無余儀事ニ付、被思召候得共、先以御幼君之御儀御政事之儀御自分江多分御任セ被置候義、殊ニ御勝手向積氣御六ヶ敷被為在候処、段々格別之心配を以夫々江申談差図等も行届候故、當時聊之御差支も無之段、全精忠之至被思召候、右ニ付而も御加恩等之思召数度被為在候得共、御自分氣質且家筋等ニ而ハ容易ニ御請被致間敷哉と、是又御心配ニ常々被思召候、乍御心外無其儀被為過、甚以御不快被為在候、第一追々御成長被遊候付、最早来秋者御乗出被遊候御儀、御自分

ニも嘸大悦ニ可被存義、万端御大要之御儀共数多被為在候御儀、何分如何様被押張候而も御入部後迄之処不被相勤候而ハ不相成儀、是又去々春四家之面々上書其一件ニ付而ハ御自分心配ハ不及申儀、上御厚配不御一形儀、追々御落着ニハ相成候得共、無御抛御事濟と申ニも未相成兼候儀、大家代々重役等も被仰付候面々等迄も過半絶家、誠以御手薄之儀、當節御自分事被致隱居候而ハ御外聞ニも相拘候儀、甚以御大切之御儀病氣無余儀事とハ乍申、此処呉々茂御不快ニ被思召候、誠ニ年来段々誠忠被相尽候事故、氣楽ニ被致保養候之様被遊度思召候得共、何分御入部迄之処格別ニ御大切成御時節、此上ハ被致隱居候心得ニ而、幾日出仕無之候而も引込等之申達ニハ不及、野間等へも被罷出常々心儘ニ被致保養、隱居同様之心得ニ而、快和之節折々被致出仕、万端御政事向厚申談被致候様御頼被思召候、此上隱居之儀幾度被相願候而も御取上不被遊候、且又御自分等格別老

年と申ニも無之、病氣間も無之儀、旁以当御時節之
 処厚く被致勘弁被押張精忠無之候而ハ不相叶儀、常
 々保養專一之儀被思召候、依之願書御差下ケ被遊候、
 此旨申達候様、江戸表方被仰付越候事

五月

常真院様・貞恭院様方も殿様御同様此上何分被致保
 養候而も御入部迄之処在勤無之候而ハ御家之御為ニ
 不相成義、誠ニ去々春方四家之一条ニ付而ハ猶更之
 儀、此処ハ得斗被致勘弁病氣迷惑ニハ可有之、其段
 ハ氣之毒千万ニ被思召候得共、当節隠居被致候而ハ
 実ニ殿様御為筋ニ不被為成候、万端御力ニ被思召無
 程御面会も被遊、御政事向之儀何角御尋も可被遊と
 毎々御噂被遊、且又貞恭院様御事御承知之通御不例
 ニ被為在候処へ隠居願之趣御承知被遊、誠ニ御力な
 ぶ被思召、時々其儀計御意被遊候由、殊之外之御当
 惑之御様子被為見候、此上押而再願有之候而ハ御不
 快之御障ニも可被為成哉と心配不薄、何れも恐察罷

在候、何分此処能々厚御勘弁無之而ハ不相叶義ニ御
 座候、先比静馬帰凳ニ付而何角之御模様承知之儀ニ
 付、彼是相心得申達候様被仰付候、此末再三被相願
 候得者定而御二方様御不快ニ被為思召御当惑も可被
 遊御儀、御病氣嘸々御当惑可有御座候得共、同席共
 いづれも愚配致し罷在候、何分不外格別之御家柄之
 義、殿様奉始上々様ケ程迄ニ御力ニ被為思召御頼被
 遊候付、此上押而再三御願書被差出候得者失敬至極
 御座候得共、是迄積年御忠節被相尽候処誠ニ御厚配
 も薄く、可相成同席共御力ニ被為罷在候義、殊ニ追
 々御乗出し御入部被為成候御儀、乍憚数拾年之御忠
 勤御辛勞被成候御儀、唯今御大切成御場所ニ相成御
 願等押而御差出被成候而ハ、此度御使被仰付罷出候
 面々、申達方不行届候而、御願書被差出候様ニ相成
 候而ハ実ニ迷惑至極、幾重ニも厚御考慮被下、御保
 養被成候様奉存候事、

五月

○岩田静馬五月十五日に江戸より帰着、二十六日使者として左京宅へ。

一八四 河野瀬兵衛処刑(天保六年六月六日)

左之通懸り青木弾右衛門江相伺候付、伺之通申談、

一 七日朝六半時揃之事

一 申渡之儀牢屋口ニ引出し、警固役ニ申渡、直ニ繩を

懸ケ仕置場へ連行之事

一 申渡書左之通、

瀬兵衛

当米五拾五歳

其方儀不届之儀有之、去ル辰ノ六月十一日離散申付

置候処、其後御構場所をも不憚勝手ニ徘徊致し、剩

江戸表へ罷出、重御方々江巧を以種々書出候付及吟

味候処、一々証拠筋無之、詰ル処自分一己之考へ推

察或は風説等取交書出し奉恐入候旨及白状、必定、

上を欺キ巧を以在役之面々を仕落し、己帰参致し諸

事取行可申と之企、既ニ主計・玄蕃・清兵衛・市郎

右衛門尋問之節茂其方々申進メ候趣及白状、全徒覚之張本大胆之始末、不義之大罪重々不届之至ニ付、於成敗場討首申付候者也、

六月

一八五 仙石家の親戚(天保六年八月十七日)

覚

一 (井伊故掃部頭直提妻者仙石故播磨守久道妻ノ妹

井伊掃部頭殿

一 酒井故雅楽頭忠恭女者仙石故播磨守久道妻

酒井雅楽頭殿

一 松平故内蔵頭治政ノ妻者仙石故播磨守久道妻ノ姉

松平伊子守殿

一 (松平故紀伊守光晟女者仙石故兵部少輔忠俊妻

松平安芸守殿

一 養母方伯父

松平伊豆守殿

一 養母方從弟

酒井撰津守殿

一 養母方叔父

阿部能登守殿

一 養母方從弟

中川修理太夫殿

一 戸沢主計頭正良妻ハ仙石故播磨守久道妻ノ姪

戸沢大和守殿

一 井上故大和守正経妻者仙石故信濃守
政房女
五代

井上河内守殿

一 牧野故佐渡守宣成妻者仙石故播磨守久
道姉

牧野山城守殿

一 養母方叔父

本庄伊勢守殿

一 小笠原近江守貞温妻者仙石故越前守政
辰女

小笠原近江守殿

一 養母方叔父

津軽左近将監殿

八月六日

御名

一六 仙石左京着府の報 (天保六年九月十二日)

九月三日

仙石左京

右着府ニ付、殿様方品川迄御徒士使并御兩院様方者
同所迄小頭を差出

右同人

右着府ニ付、前格之通於御用部屋着府落着之御料理
被成下候間、緩被致頂戴候様、御側御用人を以被仰
出候、

仙石左京

右於御座之間御目見、畢而御兩院様右同断、

岩田静馬

右同断、

一 左之通御目付へ申談候、

生駒主計・荒木玄蕃・酒勾清兵衛着之節、御裏門
方直ニ困座敷江可致着事

○九月十二日到着の便に記載、生駒主計らは九月四日に

江戸着。

一七 公裁開始第一報 (天保六年九月十三日)

以飛札致啓上候、殿様奉始御双方上々様益御機嫌能被
成御座奉恐悅候、将又仙石左京始十四人之面々御呼出
之所、別紙之趣ニ付、早速足輕飛脚を以申達候、此段
可得御意、如斯御座候、恐惶謹言、

九月五日夜

長岡右中

杉原官兵衛

青木弾右衛門

御用番様

猶以此表三御屋敷共外ニ相替候(儀)無御座候、

追啓今五日五ツ時脇坂中務大輔様江左京方始三人之面々御呼出之処、追々御吟味筋有之候処、如何様之筋哉一円此方之申立御聞入無之、却而左京儀大罪人と而已巖重ニ御叱り而已ニ而誠ニ絶言句候事共ニ御座候、乍然善悪ハ相分り可申なれとも、はけしき御叱而已ニ而聊も申筋相立候場ニ至り不申、無ニ入罷在候、仍而火急ニ御親類様方へ別紙之通被仰進、打寄是非御老中様江罷出候而も善悪は相立、御家御安全之処のミ評義(議)仕候、右ニ付左之面々猶又御呼出ニ付、早々昼夜之御いとひなく急ぎ御出府有之、其外江御談静謐候様御座候、

仙石小太郎

ほか五人略

右之面々江火急出府精々御談御座候様存候、猶又右様国家之騒動ニ而者別而町在ニ至迄さわき立申へしと存候間、其処精々其向々へ御談静謐候様御談第一ニ存候、

只其処一統致心痛候、何れも此場ニ至候而は投身命いケ様共致し御家安全等祈取計申候間、左様御承知何分ニも御地之処能々御守護御座候様存候、尤此度之人別ニ者警固等ニハ及ひ不申候、成丈ケ人数少ナ之方宜、其表も御大切ニ御座候、くれくも諸向厚心得、昼夜無油断気を付ケ可申候、精々御談御座候様専一ニ存候、恐惶謹言、

九月五日晚七ツ時出ス

長岡右中

杉原官兵衛

青木弾右衛門

服部弥兵衛様

斎藤岩尾様

杉原三郎兵衛様

井上三郎左衛門様

倉品老之助様

一柳亘理様

井伊掃部頭様

松平安芸守様

酒井雅楽頭様

松平伊豆守様

中川修理太夫様

酒井左衛門尉様

阿部能登守様

松平美作守様

秋月筑前守様

右之御方々様御家老衆江今日仙石左京始拾四人之面々御呼出之処御家御大切場ニ相成候ニ付唯今御屋敷江被罷越候様、御頼之趣私共方申遣候、

一八八 提出指示の証拠物件（天保六年九月二十三日）

出石表ニ有之候、

一御朱印蔵入日記 是者天明年中方此節迄之分、

一家伝記 是者当時御朱印蔵之内ニ入有之趣ニ候得共猶當時

納有之場所も可被中間候、

一 武具櫓入日記 是者天明年中方此節迄之分、

一 西岡斧七方江戸表ニおゐて差出候書付、

是者岩田静馬・山本耕兵衛方ニ有之管ニ付、穿鑿いたし可被差出候、

御朱印入候箆笥三ツ引出之内下之引出ニ入有之候由、

一 仙石左京方上納いたし候井上真政脇差代料、

但、封之儘可差出候、

一 仙石左京自筆ニ見合セ候文通類、

右品々取調可差出候、

九月十四日

一八九 十二月十九日到着の江戸よりの書状・仰渡書

為御意申入候、然者今昼時過御老中様方御連名封御奉書到来之処、就御用之儀、御用番松平伯耆守様御宅江御一類中様之内御兩人可被差出旨被蒙仰、依之為御名代御先手能勢惣右衛門様・玉虫十左衛門様御出被成候処、左京始御家政取乱候一件之儀ニ付、段々被仰渡之

上、式万八千八拾八石余之御高被召上、御城知其儘被
差置三万石御高ニ被仰付、其上御閉門被仰渡、扱々絶
言語恐入候次第、御歎息被遊候、右ニ付而者其表御家
中在町ニ至迄猶更相慎候様、万端無手被申談候様、
此段能々可申入様被仰出候、恐惶謹言、

十二月九日

長岡右中

服部弥兵衛殿

斎藤岩尾殿

河合庄左衛門殿

杉原三郎兵衛殿

倉品老之助殿

波多儀左衛門殿

一書拔ニ申達候通、今日御用之儀ニ付、御先手御兩人
様為御名代御出被成候処、御別紙両通之通被蒙仰、絶
言語奉恐入候御儀御座候、然ル処左兵衛・右中兩人
共御呼出ニ而朝四ツ頃方御評定所江罷出候儀、御用

部屋も明キニ相成御用人斗之儀ニ候得共、先々御留
守居等申談、御名代等御頼之何角御都合ハ能相濟候
由、夕方兩人共罷帰、右御用召之趣致承知、右中儀
ハ早速出仕致し相待罷在候処、夜ニ入候而一向何之
御沙汰も無之、如何と心痛罷在候処、漸ク九半時ニ
も可有之哉、真田儀大夫罷帰、御別紙之御申達、誠
ニ驚入一統絶言語恐入候斗、夫方御名代御二方様夜
半過ニも可有之御出、御別紙被成御持参、御渡ニ付、
上江茂申上候処、甚恐入思召御歎息被遊候御事之由、
別紙被仰渡書写、

仙石道之助

其方元家来ニ而出奔致し候神谷転事、虚無僧友鷲儀、
不屈有之ものニ付捕渡之儀筒井伊賀守江申越候間、然
ル処他之引合も有之ニ付、寺社奉行ニ而及吟味候処、
其方政治向不正、其外不容易儀共相聞候、依之於評定
所被遂御詮儀候^(聽)処、家老仙石左京儀其方家政を取乱し、
身分不相応奢侈超過いたし、殊ニ其身之非を為可取隠

奸計を以主人為筋を申立候家来共を讒訴之趣ニ吟味、
為詰、死罪其外之仕置申付、且又宇野甚助等左京ニ全
同意、不慚不屈之取計致し候始末及白状候付、夫々御
仕置被仰付候、政治向之儀者第一之儀ニ候処、家来共
家政取乱し候を其心付も無之儀、不調法被思召候、依
之急度も可被仰付候得共、若輩之儀ニも候間、格別之
思召を以、高五万八千八拾八石余之内、城地其儘被差
置、二万八千八拾八石余被召上、三万石高に被成下、
且又閉門被仰付候、

5 風俗に関する布令

一九〇 下男下女出代り (例年三月十五日)

一 御徒士頭達、

御家中下男下女出代りニ付、御徒士御条目持參持

廻り候処、相替儀無之由、御条目式通り差戻之、

一九一 下女出代り (例年九月十七日)

一 御徒士頭達、

御家中下女出代りニ付、御条目読渡之儀御徒士之
もの江申談、相廻り候処、都而相替義無之由、

一九二 足輕共稽古之達 (文化十三年二月二十五日)

一 月番御物頭達、

例年之通来月朔日御足輕共月番稽古為仕候付、

御筒玉葉之儀申談具候様申達、則御櫓御武具役江
剪紙を以申談、但、御目付を以申談

一九三 縮緬機立見禁止 (文化十五年三月十五日)

一 左之趣町方江可申談哉、町奉行相伺候付、伺通申談、

尤右ニ付御家中江も左之趣申達置候様御目付江申談、

近來町方江縮緬機相始候処、右機見物之様子ニ而
若きもの共織屋戸外ニ立止、織方奉公人之手元差

支候之由相聞、不宜風俗如何敷ニ候、右様之^(儀)義有
之候者急度相糺し申付方茂有之候間、以来織屋戸
外江立止り申間敷事

右之趣町方江町奉行方申談候間、御家中之儀も召仕
等心得違無之様可被申付置候、此旨御家中江各方可
被相達候、以上

三月十五日

早川忠左衛門

御目付中

一四 料理仕出し屋への出入注意(文政元年六月二十七日)

一左之通御触差出、御目付江申談、

町方ニおゐて料理仕出し之趣を以、專酒食を商ひ人
寄せ致し候ものとも前以有之、渡世のためとハ乍申、
風俗ニも拘り候儀如何敷儀ニ付、商売相改候様毎々
町奉行方申付有之候処、右申付不相用、近来別而相
長し候趣、不届ニ付此度吟味之上手当申付有之候、
右様之場所江御家中之面々末々ニ至迄罷越候儀者有

之間敷候、年若之面々等間々心得違之族も有之哉相
聞、不行作之至候、常々親々近親等之向方心添も可
致事候、前以部屋住之面々等会合之席酒肴を取扱候

^(儀)義御沙汰茂有之候処、右体不埒之場所江打寄候儀ハ
猶更以て不都束之至候、以後右体之場所江罷趣候族
相聞ニおゐてハ御糺之上急度可被及御沙汰候事

右之趣御家中江各方可被相達候、以上

六月廿七日

早川忠左衛門

御目付中

一五 子供の屋外花火禁止(文政三年七月四日)

一左之通御目付江申談、

近來子共宅外江罷出、花火を弄ひ如何敷事ニ候、
右体之^(儀)義無之様、親々方可申付事
右之趣御家中江各々方可被相達候、以上

岩田静馬

一六 鹿狩願 (文政二年二月六日)

一 御郡奉行達、

山之中

土野組

弘原村々

右明七日 御城山ニおみて鹿狩仕度旨相願候由、故障も無之候ハ、願通申付候様申談、

但、当時 御城山ニ者大殿様御鳥屋も有之ニ付願

之趣、貢を以相伺候処、任勝手候様被 仰出候

付、則願之通申談、

一七 深笠着用許可願 (文政四年六月二十一日)

一 御用人達、

左之趣相願候由、

此度三ヶ年之間御引米被仰付御目^(録)等頂戴仕難有旨

然ル上者如何様ニも取統御奉公無御間欠相勤申度、

然ル処少身志之儀ニ付、御年限中左之通相願候由、

一 御奉公勤向之外余力之節者山野相働、其節深笠相
用申度旨、

但、御城山和田山枯木拾ひ申度、尤生木ハ一切

取申間敷候、

一 町方調物等罷越、重高之品持参仕候節ハ深笠相
申度旨、

右之節ハ御傍輩中^(辭儀)辞宜合不仕候様

六月十九日

小役人共
詰番共

一八 盆中注意 (例年同文にて) (文政五年七月十二日)

一 町奉行達、

左之通申談候由、

一 盆中町之掃除入念火之元別而大切ニ付、戸外

へくわへきセル仕間敷事

一 寺之灯笼灯捨ニ仕間敷事

一 夜中墓所ニ参詣仕間敷事

一 踊り之ものかむり者仕間敷事

一 夜分近在へ罷出替り候体ニ而踊り申間敷事

一九 文政六年四月四日夜大火災

一夜八時比火事沙汰有之、早鐘撞候付、早速出仕致し候処、鉄砲町橋より四、五軒西之方裏町町家々出火、折柄南風強節、時に相募候付、左京方はじめ玄蕃・清兵衛火元江罷越裁許いたす、御用番(仙石左兵衛)并主計居残り罷在、

一 西御殿江為伺兩人罷出、

一 南風烈敷、直様鉄砲町乗竹弼・金沢半蔵・杉原官兵衛屋敷類焼、裏町へ左右江火移り鉄砲町屋敷御長屋不残、如来寺焼失、既ニ昌念寺も危候処、段々敵敷相防候故別条無之、裏町不残、田結庄町下西側へ真学寺下溝を東側は裏町上角を下不残、川原町堅横不残焼失、六時過鎮火ニ相成、左京方玄蕃・清兵衛御殿江引取、

五日 大南風(昼八時地震、其後強風続夜九時比の折々雨降り明ヶ前風落大雨)

御郡奉行へ

一 右火災ニ付、警固役とも当分之処御城下廻り申談、

一 町在相働候ものへ弼被成下候間、町方ニ而御台所之

者罷越、費出し候様可申談旨御用人江申談、尤場所

之義吟味之上、可然町家ニ而費出させ候様申談、

一 左之通焼失之由并同居之義左之通翌六日申達、町方之分者御郡奉行を申達、(燒失家中氏名并同居方は略す)

裏町 六拾五軒

田結庄町 拾老軒 内老軒半焼

川原町 百六拾五軒

如来寺

御番所一ヶ所

惣

家数貳百六拾九軒 内四拾軒御家人

寺一ヶ所 幕府への報告 侍屋敷 貳拾八軒
町家 貳百四拾老軒
寺 一ヶ所

(四月十七日)

一 左之通面々江申談候様御用人江申談、

三百石以上 三百匁ツ、

貳百石以上 貳百匁ツ、

右以下 百五拾匁ツ、

無足 百匁ツ、

小役人 五拾五匁ツ、

右之急火ニテ類焼之処、先達而上米被仰付遂艱難候

義ニ付、格別之以思召、為御手当、右之通被成下候事

小頭 金貳百疋ツ、

御足輕 銀五兩ツ、

御中間 金百疋ツ、

右急火類焼ニ付被成下、

家別

本町 米六斗ツ、

端町 同 米四斗ツ、

右同様之処、先達而御用銀被仰付、追々遂皆納手

薄之儀ニ付、是迄本丁江四斗ツ、端町貳斗ツ、被

成候処、格別之以思召、被成下候事

十日（火災關係のみ抜粋）

一 左之通御目付江申談、

町方江

兼々諸商売過分之利を取商不致候様申付置候処、此度火災ニ付、諸式直段上ケ致し并志路物買候も有

之趣相聞、不埒之事ニ候、時々遂吟味候様小役之もの

とも江申付置候間、右体之者於有之ハ急度可申付事

但、過分之高利を貪り売買致し候もの有之候ハ、買主方

可申届候、



右先達而依願問屋申付置候処、此度火災ニ付行届申

間敷ニ付、勝手ニ売買不苦候事

右之通町方江申談候間、御家中江茂各々可被相達候、

以上

四月十日

仙石左兵衛

二〇〇 藩主政美病氣ニ付、諸杉社ニ祈禱

(文政六年九月二十六日)

一 先達而方

殿様御不快歟と不被遊候付、何卒御早く御順快被為
在候様御大老始同席共并御用人共先比於諸杉御祈禱
致し候様、大善院江相頼可申旨御用人江申談候処、

早速御祈禱も致し候得とも兎角御同編ニ被為在、然
ル処御役人共も追々御祈禱仕奉差上度、不苦儀ニ御
座候哉、御用人を以内々申達候付、志之義^(儀)ニ付苦ケ
間敷旨申聞ル、

二〇一 無灯火夜中往来禁止 (文政八年七月二十三日)

一 左之通御目付江申談、

御家中之面々夜分市中無提灯ニ而往来仕間敷旨去冬
申談置候処、近来心得違不行作之族茂有之趣相聞如

何敷事ニ候、以後心得違之面々於有之者、急度可被
及御沙汰候間、子弟之面々江者猶更親々より敷敷可
被申付置候事

右之趣御家中江各方可被相達候、尤支配々へ申聞候
様、是又可被相達候、以上

七月廿三日

青木与惣

御目付中

二〇二 初午之節大鼓打候而も不苦哉

(文政九年正月二十九日)

一 初午之節於稻荷太鼓打候而も不苦候哉、多年御心付
被遊候付、不苦候者此度ハ何れ方成りとも間を合置、
追而御献備被遊度旨大殿様方被仰出候義^(儀)ニ付、其旨
貢迄申達、来月初午ニ者御櫓之太鼓差出候之様可申
談旨、御用人江申談、

二〇三 殺生停止 (文政十年十二月二十八日)

一 左之通町奉行江申談、

町方之もの共殺生停止之旨前々申談、去戌ノ七月ニも申談置候処、近來心得違之ものも有之趣相聞、如何敷事ニ候、以後心得違無之様、可被申付候、

二〇四 疱瘡流行ニ付、御城稲荷へ祈禱

(文政十一年五月二十七日)

一 此節疱瘡流行ニ付、御家中町在為無難二夜三日之内

御祈禱被仰付候間、左之通寺社奉行江申談候様御用

人江申談、

御城
稲荷

御祈禱料 銀壹枚

御初尾 銀壹枚

右 御代参

御用人

一 右ニ付左之通御目付江申談、町在江茂申触候様、兩奉行江申談、

此節疱瘡流行ニ付、於稲荷社明廿八日夕二夜三日

御祈禱被仰付候間、志之面々勝手ニ参詣不苦候、

右之趣御家中江各方可被相違候、以上

五月廿七日

山村 貢

御目付中

二〇五 初午ニ付、稲荷社へ代参 (文政十二年二月六日)

一 初午ニ付、稲荷社江御代参、

御小姓頭 堀 七郎兵衛

右今朝相勤候段、申達、

一 御目付達、

初午ニ付、御城稲荷社江御徒士目付共相詰候処、

都而相替儀無之旨、申達候由、

二〇六 橋上夕涼禁止 (文政五年六月十日)

一 左之通御目付江申談、

一 為涼、夜分橋々江罷出候而者往来之妨ニ茂相成ニ付、罷出申間敷旨去巳ノ六月申談候処、心得違之

向茂有之哉ニ相聞如何敷事候、以来罷出候もの有

之候ハ、廻り小役之者ヲ相糺し申達候様申付置候間、以来右体之義無之様、召仕等江も急度申付可被置候、右之趣御家中江各方可被相達候、以上

六月十日

仙石左兵衛

御目付中

二〇七 御陰参り日延べを促す布達 (文政十三年四月十一日)

御郡中江

当節勢州為参詣多人數罷出候趣相聞候処、追日耕作并蚕專之時節右様人数多罷出候而ハ作方手後ニ罷成、御年貢方ニ茂拘り、終ニハ銘々自分之難渋ニ相成候者眼前之儀ニ付、当節参詣之儀相見合、根付後手透ニ相成候上、都合次第参詣致候様、急度相心得可申候事

四月

二〇八 無願豊岡江罷越を禁ず (文政六年二月二十日)

一 左之通御目付江申談、

御家中子弟之面々并勤仕内無願豊岡江罷越、剩及遊興候族も有之段相聞候付、以来心得違無之様去ル辰年申談置候処、尚又近來心得違之族も有之趣相聞、不埒之至如何敷事ニ候、以後心得違之面々於有之ハ姓名相糺、急度可被仰付候間、右之趣各方向々江可被申談候、以上

二月廿日

仙石主計

御目付中

四 近世後期の町方の暮らし

1 出石藩『御用部屋日記』

三〇九 文政八年正月御用部屋日記 (抜粋)

(表紙)

文政八乙酉年

御留守
日記
岩田静馬

正月大

(当月月番)

御年寄

岩田静馬

御勝手方御用人

青木与惣

御小姓頭

原五郎右衛門

御用人

服部弥兵衛

御物頭

岡部四郎左衛門

御郡奉行

土岐雄之丞

町奉行

倉品十助

御勘定奉行

西川惣左衛門

御徒士頭

岩少兵衛

御目付

小川八右衛門